
転生先はインフィニットストラトス (リメイク)

古手雅樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生先はインフィニットストラトス (リメイク)

【Nコード】

N3354X

【作者名】

古手雅樹

【あらすじ】

この作は1作目の転生先はインフィニット・ストラトスのリメイク版です

今回は乗る機体など制限されてますが基本は旧作と同じです

まあ多少変わりますが大丈夫か？

作者 大丈夫だ問題はない（あ・・・これフラグだわ）

という事でいきますよーん

転生先はI Sの世界

俺の名前は古手雅樹、高校受験が終わり現在帰宅中

そして現在駅のホーム

古手「あーつかれた帰ってI Sみてーな小説も買わなきゃ・
あとカプセルファイターの機体も育成しないといけないし・
時間をくれ」

『まもなく3番線に電車が通過します白線の内側までお下がりください』

ぷわーん

古手「おっと・・・通過か白線白線・・・」

「きゃああああ誰か！誰かあのことを助けて！」

古手「なに！畜生！こんなときに！誰か！非常スイッチ押せ！」

古手は線路に降りて落ちた人を助ける

古手「くそっ！間に合うか？・・・いや！間に合う！」

古手はとっさに子供を拾い上げホームに戻すしかし

ぷわーんぷわーん・・・どっかーん

古手は引かれて血だらけになってしまった

古手「ここは・・・どこだ？」

「ここは死と生存の境目じゃ」

古手「という事は・・・三途の川ということか」

「そうじゃ」

古手「あんたは・・・神様ということか」

神「頭がいいのうそうじゃ、私が神じゃ」

古手「さて何でこうなったのか教えてもらおうか神様」

神「実は・・・古手雅樹と古手正樹をまちがえてしもうて」

古手「あー・・・あるあるあ・・・ねーよwww

どうしてくれるんだよwwwマダやりたい事あったのにwww」

神「だからそちを転生させようとおもったのじゃ

転生先はインフィニット・ストラトス機体はそっちがきめてよい

ただし10機までじゃ」

古手「んーならカプセルファイターというおんげにある
機体からで・・・と・・・これもいいな・・・これか？これか？」

神「きまったようじゃのう体はどうするんじゃ？」

古手「んーなら体はできるだけ強化マックスで
ついでに機体んだけどオーバーカスタムEXにしておいて」

神「わかった・・・さて色々決まったようじゃが」

古手「そうできたならISのコア作れるようにしたいな」

神「ふむよかろう」

古手「ではこれでいいかな足りなかったらこっちから呼んで
追加という事で」

神「ふむ・・・じゃあいつてこいあっちの時間は
ISが発表される前場所は日本じゃそれとあっちでイゲギユラー
が起きるかもしれんそれは注意じゃ」

古手「了解ーじゃーいつてくるわ」

神「あーこれこれそっちではない」

古手「ほえ、どこだ？」

神「神こつちじゃ」

古手「・・・それは・・・」

グイツ
ガゴン

古手「ぎゃあああああああああああああああああああああ」

神「後は頼むんじやぞー」

└

転生先はI Sの世界（後書き）

さあ・・・やらかした

設定人物 設定機体

名前 古手雅樹

外見 バカテスの秀吉と同じ

性別 男

○は変形として使える機体

使用機体

ダブルオーライザー

(ダブルオーガンダム

ダブルオーガンダムセブンソード)

ストライクフリーダム

(ミーティア)

インフィニットジャスティス

(ミーティア)

ゴッドガンダム風雲再起

(ゴッドガンダム)

VガンダムHWS

(Vガンダム)

ガンダムエクシア
(セブンスード・アヴァランチエ)

ウイングガンダムゼロ(EW)

ガンダムデスサイズヘル(EW)

ダブルオークアンタ

フリーダムガンダム
(ミーツィア)

スキル説明

機体例 ガンダムデスサイズヘル(EW)

スキル1例 オートロックオンジャマーEX／

敵のオートロックオンを無効化させる

スキル2例 ハイパージャマーECM

ユニットが待機動作時に潜伏＋攻撃力増加＋レーダーに敵軍表示

以下スキルなどは カプセルファイターオンラインウィキを見てく
ださい

A
I
テ
ィ
エ
リ
ア
・
ア
ー
デ

設定人物 設定機体（後書き）

ワンオフアビリティーかなり悩みました W
W

白騎士事件（前書き）

本編ですよー

白騎士事件

古手「ここは・・・海岸か」

ティエ「ああそうだ」

声が来るほうは腕にある時計からだった
そこからティエエリアが出てきた

古手「うおWWびびったWW」

ティエ「そんなにびっくりすることはないじゃないか」

古手「ごめんごめん、ちなみに初期設定はおわってる？」

ティエ「ああ大丈夫だいつでも機体は使えるただし
ダブルオークアンタはオーライザーを20回使わないと無理らしい」

古手「わかった」

ティエ「!? こっちに向かってくるミサイル2000以上!」

古手「なに!・・・白騎士事件か」

ティエ「そうだ」

古手「・・・ならばフリーダム展開して迎撃する！」

ティエ「了解　フリーダムガンダム展開」

古手「これはきついな・・・ミーティア装備できるか？」

ティエ「大丈夫みたいだ装備するか？」

古手「ああ、お願い」

ティエ「了解、ミーティア装備」

ミーティア装備のフリーダムになった古手がミサイルのところに行く

古手「ちょっときついかな　マルチロックオンいけるか？」

ティエ「大丈夫だロックオンは僕とヴェーダがやる」

古手「了解、古手雅樹　目標を迎撃する！」

千冬サイド

ドカン　ドカン　ドカン

千冬「これはきついな」

ドカン ドカン ドカン

東「ちーちゃんまだまだいくよー」

ドカン オカン ドカン

千冬「ああそうだ・・・いけない！」

カスッ

千冬「これはやばい」

p p p p p p p p

千冬左から高熱源接近?!

ドッカーン

千冬「あれは……おい東あれは何だ？」

東「そうだね……未確認ISといっておくね」

pppp

千冬「オープン回線……」

ぴっ

古手「こちら フリーダム 今から援護します」

千冬「ああ……わかった（フリーダム……）」

古手「ミサイル残り本数は？」

千冬「1500だ」

古手「任務了解 ティエリア！」

ティエ「了解ロックオン完了」

古手・ティエ「うおおおおおおおおおお」

ハイマツトフルバーストにより500本はへった

千冬「こ・・・これは！」

ティエ「残り本数1000」

古手「ちっ、まだあるか！ハイマツトフルバーストチャージにどのくらい？」

ティエ「5分だ」

古手「それだと間に合わない！」

ティエ「だがどうする？」

古手「そうだ ウィングガンダムゼロを使う」

ティエ「そうか！ローリングバスターライフルで250—600は

減らせる」

古手「そうだ！機体変更！」

ティエ「機体変更！ウィングガンダムゼロ（EW）」

古手の周りが光る

千冬「な・・・なんだ！」

そしてそこには見たこともないISがあった

千冬「か・・・かわっただと！」

古手「前出る！」

ティエ「接触まで2分」

ティエ「来た！」

古手「くらえ」

2つあったツインバスターライフルを右手に1本左手に1本もち
射撃しながら回る

千冬「束！アレは何だ？」

束「あれは攻撃しながら回ってるみたいだね」

古手「ティエリア！フリーダムに！」

ティエ「了解」

そしてまたフリーダムに戻り本数を減らす

ティエ「残り2本！」

古手「そこ！」

ドカン ヒュン

古手「しまった！」

千冬「はあああああ！」

ドカーン

千冬「はあ．．．はあ．．．」

古手「はあ．．．．．はあ．．．」

千冬「ありがとう．．．私は織斑千冬」

古手「．．．古手雅樹」

千冬「フリーダムと言ったな誰が作った」

古手「それはいえん」

千冬「わかったお前は どうする？このままだと捕まる」

古手「大丈夫だ海に潜って移動する」

千冬「わかった それじゃ」

2人は別々に別れそれぞれの所に移動する

古手 現在旅行中

ぷわーん

古手「おーここがパリかーすげーな
パリって言ったらピザだよな」

ティエ「そうだな」

あれから2年がたった

今俺達はパリに居る

なんでかって？それは旅行中である

古手「あーまじか千冬さん2連覇ならなかったか」

ティエ「そうみたいだな　なんか千冬の弟を連れ去ってそれで
救出するのにそれで2連覇ならなかったらしい」

古手「そうか」

古手が立って移動しようとした瞬間

ドン

古手「おっと」

「きやつ」

古手「すまんな・・・」

「いいえこちらこそすいません
大丈夫ですか？」

古手「大丈夫だ問題はない」

ティエ「それフラグ」

「え？どこから？」

古手「あーそれはこれから」

古手の指輪からティエリアが出てきた

「すごい見たことないよ！」

ティエ「僕の名前はティエリア ティエリア・アーデ ティエリア
で」

古手「俺は古手 古手雅樹 俺も雅樹でいいよ」

「僕はシャルロット シャルロット・デュノアじゃあシャル
ロットで」

古手「あれ？デュノアって量産型ISで世界2位のところの」

シャル「はい、そうです僕はそこでテストパイロットをやってます」

古手「(まさかの嫁きたあああああああああ)」

古手「にやるほど　ということは専用機持ちってことか」

シャル「そうですね」

古手「ほー・・・ああすまんせっかくアイス食べてたところに」

シャル「あ、大丈夫ですよ」

古手「いやだめだろせっかく食べてたアイスなんだからなあ？ ティエリア？」

ティエ「そうだな」

シャル「うん、ありがとー」

古手「何味が良い？」

シャル「じゃあ・・・バニラ」

古手「まじか、じゃあ俺もバニラ　スイマセーンバニラ2つ」

店員「あいよー　これからデートかい？」

シャル「いや／＼／＼これは／＼」

古手「いやWWWこれはデートじゃWWW」

店員「サービスだほれダブル」

古手「サックスWWWほれシャルロット」

シャル「ありがとー」

まいどー

古手「さて・・・今夜の宿探すかー」

シャル「え？宿決まってないの？」

古手「まあ旅してたしよ」

ティエ「お金は結構ある」

シャル「なら僕の家きてよ」

古手「お まじかならお邪魔しようかな」

シャル「うんきてよー」

古手「おじゃましーす」

シャル「おいでおいでー」

古手「広いなー」

シャル「まあね ケーキとかあるよ？」

古手「まじかキタコレ」

シャル「にこっ」

古手「うっはーうめー」

そういえばシャルロットのIS見てみたいな」

シャル「ISを？別にいいけど明日ね？」

古手「まじでやったーじゃあ・・・そろそろ時間だからねー」

シャル「うん、おやすみー」

古手「んーおはよーティエリア」

ティエ「おはおう 古手」

ガチャ

シャル「雅樹ーおはよー」

古手「おーおはよー」

ティエ「おはようシャルロット」

シャル家庭

シャル「じゃあここらへんでいいかな」

古手「ワクワクテカテカ」

シャル「そんなに期待しないでーWW」

古手「おーごめんごめん」

古手「むー」

シャル「どうだった？」

古手「うん、良い機体だねでももうちょいOSで早くできるよ」

シャル「え？本当？！」

古手「これつかってみて」

シャル「うん、わかった」

古手「じゃあ今日はありがとね」

シャル「うんこっちもOSありがとー」

ガチャ

古手「んー満足さて・・・日本に行きますか」

ティエ「日本か・・織斑一夏のところに行くのか？」

古手「まあ・・隠居だ」

ティエ「まあいいじゃないか？」

古手「後3年したら織斑一夏がISを起動して物語の始まりが起きる」

ティエ「それまで何をしている？」

古手「まあ・・のんびりするとしま『ドッカーン』?!」

ティエ「なんだ！」

古手「ティエあそこ！」

ティエ「あれは・・・シャルロット！」

古手「助けるぞ！ティエ！フリーダム！」

ティエ「了解ZGMF X10Aフリーダム」

古手「古手雅樹 フリーダム 行きます！」

ドン！

地面を蹴りシャルロットのところに急ぐ

ぎりぎりのところで回避をする

「オラオラオラオラ」

だだだだだだだ

弾幕を回避しながら反撃をするしかし1本のミサイルがシャルに向かう

シャル「!だめ!回避できない!」

「チェックメイトだ」

シャルが目をつぶった瞬間

ビュン ドッカーン

「なんだ!」

ガギン どっかーん

相手のISの持つてゐる武装を切り刻み

「しまった武装が！」

離れたところの場所に何かが近づく

シャル「？」

なにがなんだかわからない
そつと目を開けるとそこには

4枚の羽 色は白黒青のトリコロール
極めつけはフルスキン

「こ・こいつは！」

シャル「フリー……ダム」

そこには白騎士事件にいたISフリーダムガンダムであつた

そしてはフリーダムは黒い影に向かいハイマッドフルバーストを放
つた

「く・くくるなあああ」

ドッカーン

シャル「！ビーム兵器！」

フリーダムはシャルのところに向いて頭をなでる

警備員「だれだ！」

警備員2「あれは指名手配中のフリーダムだ！」

フリーダムは警備員に気づきどこかに飛んでいく

ひゅーん どおおおん

警備員「大丈夫でしょうか？」

シャル「追うのやめてアレは僕を守ったんです」

警備員「で・・・ですが」

シャル「命令です」

警備員「わかりました」

シャルはいなくなるまでフリーダムを見つめた

古手日本帰国中の出来事

現在ドイツ国境

古手は

古手「うっはーこちら辺ひどいな」

ティエ「まるで刹那が居た場所みたいだ」

古手「ああそうだな・・・あれは」

ティエ「シュヴァルツェラ・レーゲン！」

古手「しかも4対1かよ卑怯じゃないか」

ティエ「まるで戦争みたいだ・・・」

古手「ティエ・・・武力介入する」

ティエ「いいのか？」

古手「ほおつては置けん」

ティエ「わかった機体は？」

古手「フリーダム」

ティエ「了解」

ギョ
ン

まっすぐラウラのところに向かう古手

ラウラサイド

ドドドドドドドド

実弾の弾幕の中ラウラのISシュヴァルツェラ・レーゲンのレール
ガンが火を噴く

ドーン

ラウラ「くっこのままだと・・・」

千冬「ラウラ大丈夫か？」

ラウラ「教官！」

千冬「もう少しでそっちにつく
持ちこたえろ」

ラウラ「了解」

ラウラ「はああああっ」

ドーン

「これでもくらええええええ」

ラウラ「くっ」

ヒュン

ラウラ「しまった！やられる！」

ドカーン

ラウラは目をつぶった
しかしやられる事はなかった

ビュン

「何っ！」

ラウラはゆっくりと目を開いた
そこにはシールドを前にやったフリーダムが居た

ラウラ「アレは・・・フリーダム・・・」

「フ・・・フリーダムだと！」

古手「こちらフリーダム 援護します今のうちに退避を」

ラウラ「りよ・・・了解！（声が若いな）」

フリーダムは2本のビームサーベルをつなげ「アンビデクストラス・ハルバード」
と呼ばれる両端からビーム刃を出力する形態で展開した

ラウラ「びっ・・・ビームサーベル！」

「う・・・うてうて撃ちまくれ！」

フリーダムはビームサーベルで相手の武装を破壊する

ガギンガギン

ラウラ「速い！」

古手「1機目」

ティエ「古手右だ！」

古手「あそこか」

古手は腰からビームライフルをとりもう1機の武装を破壊する」

どっかん

「ひいひい」

古手「・・・ふう・・・撤退したか」

ラウラ「きょ・・・協力感謝する」

古手「ああ問題はないそれじゃ」

ラウラ「まってくれ何でお前は強いのか？」

古手「・・・守りたいものがあるただそれだけのために俺は強くなる」

ラウラ「・・・守りたいもの？」

古手「ああ・・・お前も何かあったとき守ってやる約束だ」

ドン ひゅーん

千冬「ラウラ！」

ラウラ「教官！」

千冬「大丈夫か？」

ラウラ「大丈夫です」

千冬「あれは・・・なるほどな」

ラウラ「教官？」

千冬「いやなんでもない戻るぞ」

ラウラ「了解」

古手「さて訳解ごと起きないように戻りますか」

ティエ「そうだな」

古手「ティエエクシア迷彩モードで展開」

ティエ「了解」

ビューン（ブーストの音）

そして古手は日本へと戻った

I S 学園入学（前書き）

ほ
ぼ
コ
ピ
ペ
W
W
W

IS学園入学

古手「ん・・・ここは・・・」

神「よう」

古手「あれ神様やん」

神「そろそろプレゼントをあげようとな」

古手「5年も待ちくたびれた」

神「ほれ」

古手「こいつは・・・V2アサルトバスターとヘビーアームズ改（EW）じゃんW
サックスWW超うれしいわWW」

神「ふおおおおおそしてそちに頼みたい事がある」

古手「なにになに？」

神「もしかしたらそっちでイレギュラーな事が起きるかもしれん・・・
そこは・・・」

古手「了解 ならさ神様よ 体強化してくれないかな」

神「いいじゃろう」

古手「さんくす 体は純粋種イノベーターでSEED化で」

神「わかつた」

古手「そんならばよろしくー」

神「ほいよ」

ガゴン

古手「ぎゃあああああああああああああああああああああ」

やっぱりこうなるよね

IS学園屋上

ちゅんちゅん

少年は屋上にぐったり寝そべっていた

「一夏、そこで何をしている」

一夏「何だ箒か、どうしたんだそこで」

箒「お前を探していた」

箒は恥ずかしながら言った

一夏「なんで？」

箒「まあいろいろあるんだ」

一夏「あ、そうだ箒」

箒「なんだ？」

箒は恥ずかしそうに聞く

一夏「剣道の世界大会優勝おめでとう」

箒「なんでお前が知っている」

一夏「なんで？って新聞で見たし」

箒「なんで新聞なんか見てるんだ？」

一夏「あ、後 久しぶり、6年ぶりだけど箒だっけすぐにわかつぞ」

箒「えっ・・・」

一夏「ほら髪型一緒だし」

箒「よくおぼえている（おい箒、あれを見ろ）えっ？
何があったのか箒はびっくりしていた

ひゅーーーーーーどごおおおおおおおん

一夏「第1アリーナに何か落ちたようだ行ってみよう箒」

箒「えっちょ、待って一夏」

—————第1アリーナ カタパルトデッキ—————

一夏「はあはあここら辺だよな・・・」

箒「一夏待ってくれたって良いじゃないか・・・はあはあ」

一夏「あ、いたあそこだ箒」

箒「むっ」

2人は倒れている者に近づく。

一夏「おい大丈夫か？おい、・・・箒、千冬姉を呼んできて」

千冬「もうここにいる」

一夏・箒「織斑先生（千冬姉）！」

千冬「はあ・・・織斑先生と・・・今回は許す　で、様態はどうだ？」

一夏「気を失ってる、千冬姉・・・」

千冬「（ん・・・こいつは・・・）よし、医務室に連れて行くこれは
他言無用だわかったな？」

一夏・箒「わかった（了解した）」

古手「ん・・・ここは・・・」

千冬「目覚めたか・・・」

古手「あなたは・・・」

千冬「私は織斑千冬、このIS学園の先生だ」

古手「俺は古手雅樹 18だ」

千冬「お前があのときのISにのってたやつか」

古手「覚えていたんですね」

千冬「まあ覚えてるはずだろう」

古手「そうですね」

千冬「お前は行くあてがあるのか？」

古手「ないですよ」

千冬「ならこの学園に入るがいい学費などはこちらが援助する」

古手「その裏は？」

千冬「データ収集」

古手「俺が乗った機体時のみ動画とるだけでしたら良いですよ」

千冬「わかった」

古手「交渉成立」

千冬「じゃあこれに着替えろ」

古手「これはこの学園の制服でよろしのですかね」

千冬「ああそうだ、この学園は全寮制で部屋は・・とりあえず、すまんがベツトはあるが物置になっている部屋でも良いか？」

古手「それでうれしいです」

千冬「じゃあ着替えたら呼んでくれ」

古手「わかった」

1—2分後

古手「ちょっとでかいがまあいいか、おわりました」

千冬「おわったか、部屋はこっちだ」

教師少年移動中

古手「物置って言ってますけど部屋広いですね」

千冬「そうだな、書類、教科書はそこに入っている」

古手「ありがとうございます」

千冬「今日は寝ろ、明日から授業だそして明日からは織斑先生だ」

古手「分りました織斑先生」

明日から少年の学園物語が始まる・・・

1年1組

古手「むっはー ねむい おはようティエ」

ティエ「おはよう古手」

古手「顔洗って着替えないとな」

ティエ「今日はテストがあるらしいからな」

古手「そうだな」

千冬「おはよう古手君」

古手「おはようございます」

千冬「さて今日はテストなんだが先にご飯を食べようか」

古手「はい」

千冬「さてここが食堂なんだが今は誰も居ないが普段はここに居る」

古手「了解」

千冬「さてなにを頼む？」

古手「ならカレーで」

千冬「それだけで大丈夫か？」

古手「大丈夫だ問題はない」

ティエ「だから、それはフラグ」

千冬「おーティエリアか久しぶり」

ティエ「お久しぶりです織斑千冬」

千冬「あそうだな今までお前達どこに？」

古手「まずあの後箱根に行って隠居して2年後ぐらいにイタリアに行って」

次にドイツそれで日本で3年隠居ですね」

千冬「そうか・・・ちなみにドイツには私も居た」

古手「知ってます 弟さんを助けて情報をくれたドイツをお礼にで」

千冬「そうだ さて食べ終わったみたいだし アリーナに行くぞ」

古手「了解」

第2アリーナ

千冬「今回はテストだが本気でいけ」

古手「了解」

ティエリア「今回機体は？」

古手「本気で行けっといわれてるけど・・・デスヘルEWで」

ティエ「了解デスサイズヘルEW展開」

千冬「今回あいての山田真耶先生だ」

山田「山田真耶ですよろしくね」

千冬「おまえのISは・・・死神みたいだな」

古手「気にしたら負けという事で」

千冬「わかった でわ・・・始め！」

古手「はああああっ」

ビームシザーズで攻撃しようとするが

ガガガガガガガガガガ

古手「いけね」

マシンガンの嵐が降ってくる」

山田「シールドエネルギーがない?!」

古手「残念でした先生俺のISはシールドエネルギーがないんでね！」

千冬「だからフルスキンなのか・・納得」

古手「めんどいから終わらせるよ」

古手はハイパージャマーECMを発動した

山田千冬「き・・きえた！」

そしてビーツ

勝者古手雅樹

千冬「古手、お前何をした？」

古手「この機体のスキル2を発動しただけですよ」

千冬「スキル？」

古手「・・・ハイパージャマーECM・・・」

山田「ハイパージャマーECM？」

古手「ユニットが待機動作時に潜伏＋攻撃力増加＋レーダーに敵軍表示
これがスキルの中身です・・・後でスキルだけでしたらデータで送ります」

千冬「わかった 今日休め明日から学校だ」

古手「わかりました」

一夏サイド

「ねえねえ今日第2アリーナで死神が見えたらしいよ」

一夏「死神？」

「なんか羽がコウモリみたいでカマもってた」

一夏「すごいなそれ」

「あとさー 食堂ですごくかわいい子見つけたって誰かが行ったよ」

一夏「女の子か」

「そうだね」

一夏「食堂にいるかもね」

古手「はぁ・・・疲れた速く食って寝るか」

千冬「食べ終わったか？」

古手「はい」

千冬「ならこれを明日までに」

古手「もう覚えましたよ」

千冬「なんだと」

古手「じゃあ僕はこれで寝ますね」

千冬「明日ここに呼びに来るからな」

古手「了解」

「「「「「「「「「「「「「「「」

千冬「なんだ・・・おまえら聞いてたのか」

「織斑先生その転入生はどこクラスですか？」

「男の子なんですか？」

千冬「おまえら除いたらグラウンド10週させるぞ？」

「「「「「「「「「「「「「「「」

古手「すごい騒がしかったな・・・」

古手「そうだティエリアアストレア作れるか」

ティエ「アストレアをか？ できるが」

古手「じゃあよろしく」

古手「ふぁー・・・おはようティエ」

ティエ「おはよう 古手」

古手「とりあえず紅茶入れたら顔洗いに行くか」

古手「ティエ1時間目なんだ？」

ティエ1. 2時間目はI Sについて3. 4時間目は実践練習

古手「そうか」

ドン

千冬「起きてるか？」

古手「はい起きてます」

千冬「いやすまん、会議が送れてな」

古手「大丈夫です」

千冬「でわ、入れて言われたら入るんだぞ」

古手「了解」

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけでなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦では、入学時点での各クラスの実力測るものだ。今の時点でたいした差は無いが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間の変更が無いからそのつもりで」

「はい！ 織斑くんを推薦します！」

「私もそれが良いと思います！」

一夏「オ・・俺?!」

千冬「でわ、候補者は織斑一夏だけかほかにいないのか？」

バンツ！

古手「これはセシリアか」

セシリア「納得がいきませんわ！」

古手「原作どおりはいりまーす」

セシリア「そのような選出は認められません！

大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！

わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

古手「……………ティエ」

ティエ「何だ？」

古手「武力介入するわ」

ティエ「正気か？」

古手「大丈夫だ機体は使わん」

ティエ「わかった」

セシリア「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。

それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！

わたくしはこのような島国までISの修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

セシリア「いいですか！？ クラス代表とは実力トップがなるべき、

そしてそれはわたくしですわ！」

セシリア「大体、文化としても後進的な国で暮らさなければいけな

いこと自体、

わたくしにとっては耐えがたい苦痛で——」

一夏が言おうとした瞬間　ドアが開いた

ガラッ

古手「ならイギリスの底力を教えてもらおうか」

「「「「誰・誰？」」「」「」」

ざわ・・・ざわ・・・

古手「言っておくがイギリスだって国自体傲慢ないだろ世界一不味い料理

世界選手権第1位じゃないか」

一夏「後進的って・・・イギリスだってそうじゃないか」

セシリア「なっ・・・！」

古手（ティエセシリアが顔面トランザムしてる）

ティエ（・・・そうだな）

セシリア「あっ、あっ、あなたねえ！　わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

古手「はあっ…先に俺らの祖国を侮辱したのあんただろ」

セシリア「っ——決闘ですわ！」

古手「いいだろう先に言っておくがお前じゃおれに勝てない」

セシリア「な！言いましたわね！なら負けたら私の奴隷になってあげますの」

古手「へーww良いだろう俺は接近武器で決めてやるよ

そして俺が勝ったら・・・どうしよっかな俺のメイドということぞで」

セシリア「わ・・・わかりました」

「それ本気で言ってるの？」

「男が強かったのって大昔の前だよ？」

「セシリアさんはＩＳ使えるかもしれないけど、あなたはＩＳ使えるの？」

一夏「お前まさか昨日第2アリーナにいた死神？」

古手「死神？ ああデスヘルかそういうえば別名死神だけどまあそれは俺だな」

[illegible]

古手「そういえば自己紹介してなかったな
俺の名前は古手雅樹 趣味は特にないが
以後よろしく」

古手「後言っておくが俺もＩＳ使える時点でその考えはやめておいたほうがいい
人生この後後悔する　いいな？」

千冬「決まったようだなそれでは来週の月曜日にクラス代表戦を行う
セシリア・古手・織斑の3名は準備をするように後古手」

古手「？」

千冬「お前の席は右前から3番目の席だ」

古手「了解」

本音「布^{のほとけ}仏^{ほんね} 本音よろしくー

古手はのほほんさんに小さな声で言う

古手「会長と繋がりであるでしょメイド的な意味で」

はのほほんさんだけに聞こえる音量で話す。

コレは原作でのほほんさんが会長とつながりがあるのを知っていたからそうした。

すると、のほほんさんは一瞬だけ少し目を開いてまたつぶった？

本音「どうしてしってるのー？」

古手「ひみつーWWWちなみにこれ言ったらのほほんさん嫌いになっちゃうから」

本音「むーマッキーのいじわるー」

古手「WWWならこれなら言っても良いよ調べても俺の機体の情報は出てこないってね」

本音「なんでー？」

古手「だって俺が作ったやつだからWWW」

本音「なるほろー」

古手「じゃあそういうことで」

さてこうして1週間何をしていたかと言うと

- ・セシリアの情報集め

- ・普通に授業

- ・キントレ

の3つである

こうして1週間はあっという間に過ぎていくのであった

クラス代表戦

さて古手は現在第3アリーナカタパルトデッキである

先に織斑一夏対セシリア・オルコットの
試合をやっていたが原作どおり一夏が負けてしまい
俺の出番となった。

一夏「すまん、俺の仇をとってくれ」

古手「任せろマダあいつ調子乗ってるからな」

千冬「古手早くしろあいつはもう行ってるぞ」

古手「了解、ほんじゃまあ3分で片付けてくるわ」

千冬「正気か？貴様」

古手「全力で行きますからティエリア！」

ティエ「デスサイズヘル（EW）展開」

古手「ふう・・・さて行きますか」

箒「なっ！フルスキンだと！」

一夏「かっこいいー」

ティエ「カタパルトを譲渡 進路クリアー デスサイズヘル発進」

古手「古手雅樹 デスサイズヘル 行きます！」

3・・・2・・・1・・・ゴー

「みて！古手君が出てきた」

「本当に死神だあー」

千冬「両者準備は良いか？」

古手「いつでもいいぜ」

セシリア「問題はなくってよ」

千冬「では・・・始め！」

古手「本気で行かせてもらおう！」

セシリア「それはこっちのセリフですのことよ！」

ビュン　ビュン

セシリアがライフルを撃ってくるしかし古手はスイスイとよける

古手「ホレホレどうした」

セシリア「くっなぜ当たりませんか?!」

それはそうだ古手は始まる前からオートロックオンジャマーを発動している

セシリア「これならどうですの!」

後ろから誘導兵器を使用するが

古手「遅いな・・・」

スイツスイツ

古手「もう終わりか?ならこっちから行くぜ!」

セシリア「くっ　インターセプター!」

ガギン

古手「ほう・・・やるな・・・ならこれならどうだ？
スキル2発動！ハイパージャマーECM発動！」

セシリア「スキル2？ハイパージャマー？」

古手「こう言うことだ！」

ドカッ

セシリアに蹴りを入れると古手は1回セシリアと離れる

セシリア「なっ・・・何をしますの？乙女のおな・・・か・・・」

「ねえ！古手君どこ？」

「消えた？」

一夏「どこだ？」

箒「わからん！」

ハイパージャマ・・・そう待機状態は永遠に消えてる状態

セシリア「どこですよ！姿を現しなさい！」

古手「できると言えばできるがこいつはそういうスキルなんでね」

セシリア「スキルとはなんですか?！」

セシリアは怒ったように言う」

古手「スキルと言うものは・・・ワンオフアビリティのことといえ
ば早いかな

俺には複数のワンオフアビリティがある」

千冬「なるほどこれは・・・」

一夏「さっぱりわからん」

古手「さてお話はおしまいだ　これで俺の勝ちだ」

セシリア「な・・・なにを言いますの?まだ500も私は残って・・・
えっ」

ガギン

『し・・・シールドエネルギー0・・・勝者・・・古手雅樹』

セシリアの20メートル離れた後に古手が出てきた

古手「俺は言った・・・お前じゃ俺に勝てない・・・
それがその実力だ・・・」

古手「俺もお前はマダ弱いこれからもっと強くなれ強くなったらいい物くれてやる」

こうして古手はカタパルトデッキに移動した

一夏「すごいな！本当に勝った！」

千冬「時間は・・・2分50秒かぎりぎりだな」

古手「まあそういうことだ、じゃあ先生俺はお先にねますね」

千冬「ああ、お疲れ」

こうしてフラグを立てた覚えが無い

セシリアに優しくされた事はこれからの事であった

模擬戦

とある日の放課後

古手「織斑先生」

千冬「なんだ？」

古手「アリーナを借りたいんですけど」

千冬「ああ、わかったそのかわり」

古手「データは取るんでしょわかってます動画だけですよ」

千冬「じゃあ、私も行こう」

古手「まじですかWWW」

千冬「私が行ったら不味いのか？」

古手「いやーWWWそういうわけじゃWWW」

千冬「なら何がいけないのだ？」

古手「いやー、そろそろ別の機体も使い慣れておかないとねww」

千冬「なに、マダあるのか？」

古手「まあ織斑先生だけだらいいか」

千冬「わかったならすぐにいこう」

古手「仕事はどうするんですか？ww」

千冬「山田先生に任せる」

古手「おいおいww」

現在位置アリーナに向かう廊下

一夏「あれ古手と千冬姉だ」

古手「あれどうした一夏・箒」

一夏「いやーアリーナ借りようとしたら先約がいて」

古手「ああ、それ俺ww」

箒「そうなのか！」

古手「ちょっと機体なれしように思っ
てさ
・・・一緒に来るか？」

一夏「おーいくいく行くよな？ 箒」

箒「あ・・・ああ」

アリーナカタパルトデッキ

古手「さてどの機体から行こうかな」

一夏「そういえば古手の機体って何個あるんだな？」

古手「・・・12ぐらいかな」

一夏・箒「12！」

2人は驚いてるが千冬先生は・・・

千冬「多すぎだろ・・・」

冷静であつた

古手「さて・・・敵のAIはマックスで」

千冬「それは許可できない」

古手「えー・・・なら10でいいですよ」

千冬「わかった」

古手「先生のタイムってどのくらい？」

千冬「私のタイムは約7秒だ」

古手「了解 ティエリアよろしく」

一夏「なあ古手、そのティエリアって誰だ？」

古手「ああ、マダ2人には紹介してなかったな ほれ」

古手は前に際しだす

ティエリア「はじめまして僕はティエリア・アーデ、よろしく」

一夏「おお！、一夏、織斑一夏だ」

箒「箒 篠ノ之箒、よろしく」

古手「じゃあ挨拶は済んだところでティエリア、Vガンダムで」

一夏「Vガンダム？」

古手「見ればわかる」

古手の周りが変化して装備されていく

古手「これがVガンダムだ」

一夏「かっこいいー白式みたいだな」

千冬「背中のやつは何だ？」

古手「見ればわかるよティエリアファンネルはよろしく」

ティエ「了解」

古手「古手雅樹 Vガンダム行きます！」

アリーナ中央に着く古手

千冬『用意は言いか?』

古手「上等!」

千冬『ターテティング開始!』

古手「行け!フィンファンネル!」

ドドドドドドドドド

ビーツ

古手「ただいまー」

千冬「7秒ジャスト・・・だど」

古手「7秒かー織斑先生もう1回、

今度は違う機体で」

千冬「わかった」

古手「ティエリア インフィニットジャスティスで」

ティエ「了解」

また古手の周りが変化して赤い真紅の機体が出てくる

千冬「今度は格闘方か」

一夏「背中のはやは何だ？」

古手「リフターだよ」

古手「古手雅樹 ジャスティス出る！」

千冬『じゃあ、2回目いいか？』

古手「もち」

千冬「ターケティング 始め！」

古手「うおおおおおおおおおおお！」

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドド

千冬「・・・・・・・・」

一夏「・・・・・・・・」

箒「・・・・・・・・」

3人は沈黙している

古手「ふう・・・ただいま何秒でした？」

千冬「ご・・・五秒だと！」

千冬は驚いた自分でも時間は掛かる

古手「よっし 満足じゃあ最後に一夏模擬戦やろうか」

一夏「よっしや やろうぜ」

古手「ティエリア アストレアよろしく」

ティエ「了解 アストレア展開」

千冬「今度は何の機体だ？」

古手「ガンダムアストレア まあ試作機体ですよ
オーバーカスタムはやってませんが」

一夏「オーバーカスタム？」

古手「ああ、俺の機体はステータスをいじくる事で切るんだ
たとえばこいつを見てくれ」

古手はアストレアのステータスを見せる

古手「たとえばある一定の経験地を
攻撃とかスピード・防御とかにあげる事できるんです」

攻撃力上げたり下げたり防御を上げたり下げたり

古手「実際にやってみればわかるよじゃあ先に行ってるよ」

そうして古手はカタパルトに足を乗せる

古手「ふう・・・古手雅樹　ガンダムアストレア　目標を駆逐する
！」

一夏「これ前から聞いてると結構かっこいいんだよね真似してみよ」

一夏はカタパルトに足を乗せ大きく息を吸う

一夏「織斑一夏！白式！行くぜ！」

2人はアリーナ中央に向かう

古手「・・・おもったんだがいつの間に人がいっぱい居るんだ？」

古手が話しているときにアリーナにいっぱい集まってきた

一夏「さあ誰かが噂してたんじゃないか？」

「きゃー古手君と織斑君よ！」

「やっぱり古手君のISかっこいい！」

「今度の機体はなんていう機体かな？」

そしてとうとうカタパルトデッキに山田先生が着てしまった

山田「すごい数ですね」

千冬「山田先生なぜ君も居るんだね？」

山田「私も見たかったです」

千冬「そうか」

あきらめたようだ

古手「さて始めるよ 一夏良いかい？」

一夏「ああもちろんさ」

千冬『はじめ!』

古手「先手もらい！」

ビュン

古手はGNビームライフルで乱射する

ビュンビュンビュン

一夏「これならよける！」

古手「ほう　ならこれでどうかな」

再びGNビームライフルを乱射する

一夏「だからだいじょ・・いつ！」

ビューン

一夏「あつぶねー」

しかし一夏のシールドエネルギーは減ってる

一夏　750

古手　∞

千冬「ノーマルで250も減ったか」

古手「じゃあカスタム上げるよ」

古手はアストレアを攻撃極振りにし強化スキルを必殺覚醒をつけた

古手「さて全スキル発動！」

一夏「？」

古手「ああ、スマンナ俺の機体全てにスキルがあるんだちなみに発動したスキルは
リロードアップ 底力 必殺覚醒だ」

千冬「攻撃振りの底力だから・・・ちよつとやばくないかこれは」

ドーン

古手「おーい大丈夫か？」

一夏「だ・・・大丈夫」

千冬「古手、ちよつといいか？」

古手「わかりました、箒、一夏を頼む」

箒「わかった」

学園地下 レベル4

古手「・・・なんですか？ここは」

結構薄暗いところである

千冬「まず、聞きたい事がある」

古手「俺の機体の事ですね」

千冬「ああそうだ」

古手「俺のISはそもそもISではない」

千冬「なんだと別のコア・・・別の力で動いてるってことか？」

古手「そうです、私の機体は機体にもありますが
例えば1つ目が小型の核」

千冬「なんだと！核をISに転用するなんて・・・こちらにそんな技術こちらにはない」

古手「そうですね、それでもう1つはバッテリー」

千冬「バッテリーか」

古手「そうですねそして次はここにもあるコアですね」

千冬「・・・お前はISのコア作れるのか？」

古手「機密事項です」

千冬「わかった」

古手「そして最後に・・・GNドライブ」

千冬「GNドライブだとなんだそれは」

古手「さっき使ったアストレアの背中にあるコーンのやつです」

千冬「あれか緑色の粒子が出てきたやつか」

古手「そうですね俺はそれをGN粒子って言ってますね」

千冬「GN粒子か・・・」

古手「先生ちなみに言いますけど公開しないのなら先生のためなら
1機は作っても良いですよ
モビルスーツインフィニットストラトス
MSIS今考えた名称ですけど」

千冬「MSIS・・・か」

古手「ええ。機体はアストレイレッドフレーム」

千冬「レッドフレーム？」

古手「データは渡しておきますね」

そういつて古手はレッドフレームの情報を渡す

千冬「・・・わかったお願いするでしょう」

古手「了解♪」

そういつて古手は寮に戻った

祝いパーティー

現在とある日の月曜日
午後7時

古手「さーて寮に戻るとするか」

本音「まっきー」

古手「あれ、のほほんさんどうしたん？」

本音「おりむーのクラス長就任パーティーやるから
よかったきてー」

古手「あー・・・了解」

古手「さて1回部屋戻るか」

ガチャ

古手はシャワーを浴びたら行こうとするが

古手「・・・なにこれ」

「「「「「織斑君クラス長就任おめでとー」」」」」

なぜ負けた自分がクラス長になっているか聞いてみる

一夏「なんで、俺がクラス長に？」

セシ「それなんです、私と古手さんが
辞退したかとおもわれます」

一夏「……なるほどとりあえずわかった」

「はい新聞部です 新入生男子の取材にきました」

一夏「誰？」

「これは失礼私は薫子 よろしくね」

一夏「はぁ・・・」

黛「あれ？男子は2人居るって聞いたけどもう1人は？」

一夏「そういえばマダ来てないなあいつ」

黛「そうなのーわかったじゃあ織斑君だけ」

パシヤリ

一夏「いきなりとらないでくださいよ」

黛「ごめんごめん後一言」

一夏「・・・がんばります」

黛「文句があるなら掛かって来いっと」

一夏「いや・・・ねつ造しないでください」

黛「あとセシリアちゃんも一言」

セシ「えとですねわたくしは」

黛「長くなりそうだから以下省略」

セシリア「なっ！」

黛「さて後は集合写真っ」と

セシ「（一夏さんとツーショット）」

黛「はい 9856+2555〓?」

一夏・セシ「わからない（ですわ）」

黛「答えは私もわからない」

一夏「ならいわないでくださいよWW」

黛「さて私はもう1人の男子を探してくるね じゃね」

一夏「なんなんだ?」

古手「さあ?」

一夏「おわっ! いつのまに」

「「「「「「ブーーーーー」」」」」」

そこら辺にいた女子が古手の姿を見て

鼻血またはがつくりしてる人がいた

現在古手の姿は 猫耳＋メイド服＋尻尾＋ニーソの姿
そして外見はどう見ても女の子にしか見えない
まあ姿はバカ●スの秀吉だからしょうがないか

古手「な・・・なんだ？」

一夏「おまえ・・・何その格好は・・・」

古手「ああ、シャワー浴びて着替えて行こうとしたら
着替えがなくなってて代わりにこれがあったから着替えた」

そして古手は必殺技を出した

古手「もえもえーきゅん♪」

一夏「どきっ！」

古手「おー 一夏顔真っ赤ーWWW」

古手は一夏の顔を覗いた

一夏「おわっWWこっちみるなWW」

古手「さてこれ以上やばいかもしれんから逃げるか」

一夏「・・・そうだな」

ピューーシューシューシューシューシュー

この血の海を織斑先生が見たのは古手たちが部屋に戻って数分後だった

AM
7時

古手「さーて今日もがんばるかー」

一夏「おはよう古手」

古手「おーす」

一夏「何食べるー?」

古手「んー野菜が食べたいから野菜系でいいか」

一夏「まじか　なら俺は目玉焼き定職で」

古手「よくあさからそんなの食えるな」

一夏「お前はそんなに食べないな」

古手「ISにのって胃から出る可能性があるから」

一夏「なるほどね」

本音「おりむーとマツキー一緒に食べて良いー?」

古手「俺は別に構いやしないが　一夏?」

一夏「俺も別にいいよ」

本音「やった、そういえば今日転校生来るらしいよー」

古手「そうかもうそんな時期か」

一夏「え?」

古手「いやなんでもないそういえばそろそろだよなクラス別対抗戦」

一夏「そうだっけ?」

本音「おりむーおぼえてないのー？」

一夏「ああ」

古手「さすが一夏だな」

本音「そうだねー」

こうして教室へを向かうのであるがそこから波乱が起きるのは
古手意外誰も知らない

登場！セカンド幼馴染

教室前廊下

古手「なあ転校生って誰？」

本音「2組らしいよー」

古手「やっぱり2組か」

本音「やっぱりみたいな口だけど知ってたの？」

古手「まあね」

本音「まっきー何でもしってるね」

古手「それなりの情報があるからね」

本音「ふーん」

古手「さて席に戻るか」

本音「あーい」

っとそのときドアが急に開く

「一夏！宣戦布告しに来たわよ！」

古手「（おっときたか）」

一夏「鈴！鈴じゃないか！似合わないぞ（笑）」

鈴音「な・・・い・・・一夏！なんて「ゴツ」ぎゃ」

千冬「チャイムは鳴ったぞそこでけ邪魔だ」

鈴音「ち・・・千冬さん」

千冬「織斑先生ださっさと戻る」

鈴音「一夏後でね！」

そうして鈴音は自分の教室に戻る

千冬「さてもう少してクラス対抗戦なんだが・・・古手！」

古手「ほえ・・・あい！」

古手はいきなり呼ばれてびっくりする

千冬「一夏を鍛えてやれ第3アリーナを放課後たまに貸してやる」

古手「了解」

千冬「それでは授業を始める」

そして授業中3回出席名簿で叩かれたのは秘密である

バシンバシンバシン

「「ぎゃあああああああああ」」

3時間目前

千冬「次の授業は外だぞ早めにな」

全員「はい」

古手「さて、一夏行くぞ」

一夏「おう」

男2人はアリーナで着替えるように決められている
ちなみにここから近いのは第2アリーナ

ちなみに学園の正面入り口を後ろにして

右に寮

正面に校舎その後ろにグラウンド

左にアリーナである

（作者の妄想）

古手「速く着替えないと織斑先生の出席簿アタック
がくるから速くしないと」

一夏「ああそうだな」

千冬「さて、今日は飛行演習などを行う、織斑・古手・オルコット
飛んで見せろ」

セシ・一・古「「ハイ」」

古手「ティエ起きてるか？」

ティエ「ああ、機体はどうする？」

古手「今回はアストレアでいいか」

ティエ「了解ガンダムアストレア展開」

古手の周りが光ってアストレアになっていく
右手にプロトGNソードとGNビームライフル
左手にGNシールドを展開する

千冬「いけ」

古手「古手雅樹　ガンダムアストレア行きます」

ドン

古手は足をまげて地面をけるようにして空を飛ぶ

一夏は一步で遅れた

千冬「何をしているアストレアはともかく
性能はブルーティアーズより上だぞ」

一夏「といわれても・・・前方に三角をイメージして・・・」

セシ「イメージは所詮イメージですわ」

古手「そうだ自分がおもうように飛べばいいとおもうよ」

一夏「自由にねえ・・・うーん」

古手「まあ練習を積み重ねればいいさ」

一夏「そうか、わかった」

千冬『よし、次急降下の着地10センチセシリア・古手・織斑の順にやれ』

セシリア「じゃあ私からお先に」

ヒューン……シュゴオオオオ

古手「さて俺の出番か ほっ」

シューンシュゴゴゴゴー

古手「さて一夏の番だが……「ドゴーン」やっぱりだめだったか」

安定の信頼の犬神家

千冬「誰が穴を開けろといった後始末は自分でやれよ」

一夏「はい……」

首が抜けないらしい

古手「一夏……手伝うよ」

一夏「ありがと……」

古手「あー終わったー」

一夏「さて……いくか」

古手「ああそうだな早く行かないとメシなくなるからな」
（アリー
ナ更衣室入り）

一夏「何食べるんだ？」（上脱いでる）

古手「んー久しぶりに中華系食べようかな」
（上を着る）

一夏「おおそうだな」
（上着る）

古手「一夏はなに食べる？」
（下をはく）

一夏「俺も中華にしようかな」
（下を脱ぐ）

古手「中華そばもいいけどね」
（着替え完了）

一夏「それはらーめんだろ」
（下をはく）

古手「まあな」
（待機中）

一夏「まああっちで考えるか」(着替え完了)

鈴音「一夏やっとなたわね！」

一夏「鈴！・・・メンのびてるぞ」

鈴音「あんたがくるのおそいのよ」

古手「一夏・・・誰？(知ってるけどな)」

一夏「ああ、凰 鈴音な、鈴こいつが俺と同じ男で
IS起動できるやつのが手雅樹」

古手「古手雅樹だ 古手でもいいし雅樹でもいい」

鈴音「へえー、よろしく凰 鈴音よこっちも鈴でいいわよ」

古手「了解、一夏終わったらアリーナな」

一夏「わかった」

鈴音「何するのよ？」

一夏「ISの練習」

鈴音「なら私が一夏に教えるわよ」

一夏「大丈夫、そこは古手から教えてもらう」

古手「というわけだ、すまん」

鈴音「わかった」

箒・セシリア「ちょっといいか（ですわ）」

以下原作どおり

アリーナカタパルトデッキ

古手「さーてやるか」

一夏「今日はどうする?」

古手「んーそうだな対近距離・射撃の練習でもするか」

一夏「わかった、今日はどの期待で？」

古手「んー」エクシアのセブンスード」かな」

一夏「あれ、アストレアじゃ？」

古手「」エクシア」は」アストレア」の進化型だからな」

一夏「へえー・・・」

古手「じゃあ一夏I S装備して、ティエよろしく」

一夏・ティエ「わかった」

2人の体は光I Sを装備する

古手「さて、行きますか」

一夏「おう」

古手は足をカタパルトに乗せる

古手「古手雅樹 エクシア行きます！」

ランプが1個つつ消えて緑のランプが3つ光るそしてカタパルトが発射する

パシユ

一夏「俺も真似してみるか」

一夏「織斑一夏 白式行くぜ！」

ランプが1個つつ消えて緑のランプが3つ光るそしてカタパルトが発射する

パシユ

2人はアリーナの中央に向かった

古手「一夏いくよ」

一夏「おう」

ガギン

がギンガギン

ガギンガギン

バシユバシユバシユ

ガギンガギン

バシユガギンバシユガギン

古手「ふう・・・一夏休憩するか」

一夏「そうだな・・・またギャラリーが」

「キヤー織斑君よー」

「古手くんこっちむいてー」

「キヤーッ」

古手「まあ10分休憩してまた続きやるか」

一夏「おう」

2人はカタパルトデッキに戻った

古手「あら、織斑先生じゃんとしたんですかこんなところで」

千冬「ああ、お前のデータ収集とちょっと様子見に来た」

古手「なるほろ・・・織斑先生1回俺と模擬戦いいですか？」

千冬「いいだろうお前の实力を見ておくしかないな本気で来い」

古手「了解」

一夏「大丈夫なのか古手？千冬姉と模擬戦するなんて」

古手「まあ自分の実力くらい見ておかないとね」

そういつて古手は機体を変更する

ティエ「どうする機体は？」

古手「ダブルオーライザー」

ティエ「いいのか？こんなところで見せて」

古手「本気で行かないとね」

ティエ「わかった」

機体を粒子化させ再構築する

千冬「またすごい機体だな」

古手「機体名ダブルオーライザーこいつは強いですよいろんな意味で」

千冬「わかった」

古手「じゃあ織斑先生お先に」

千冬「ああ」

古手は足をカタパルトに乗せる

古手「古手雅樹 ダブルオーライザー行きます！」

ランプが1個つつ消えて緑のランプが3つ光るそしてカタパルトが発射する

パシユ

千冬「さて、行くか」

ランプが1個つつ消えて緑のランプが3つ光るそしてカタパルトが
発射する

パシユ

2人は空に上がった

対織斑千冬（前書き）

ダブルオーライザー初登場！
スキル2は発動させませんよ
W
W

対織斑千冬

ダブルオーライザーで出た古手

目の前には打鉄に乗った千冬

そしてそれを見てる一夏達

一夏「大丈夫なのか古手？」

箒「あいつの事だから大丈夫だろう」

一夏「そうだな」

千冬「いくぞ」

古手「はい！」

ランプが消え開始のランプが光る

それと同時に両者接近する

ドン！

ガギン ガギン

打鉄のブレードとGNソード2がぶつかり合う

古手は1回離れてGNマイクロミサイルを放つ

ドン

しかし千冬はこれをスイスイよける

千冬「あまいな」

古手はスキを入れずGNソード2からビームを放つ

ビュンビュン

千冬はこれも避けようとしたが先読みされ当たってしまう

古手「ラッキー先読み成功」

千冬「くっ」

千 CE1400↓800

古 CE2500

古手「織斑先生大丈夫ですかー？」

千冬「ああ、大丈夫だ」

古手「それじゃあ行きますよ」

ドン！

ガギン ガギン

古手「やばいなあこれは・・・」

剣だと千冬有利であるが機体性能で助けられてる

千冬「スキありだぞ」

古手「しまった！」

ドカツ

千冬は古手のおなかダブルオーだとコックピット辺りにキックを入れた

CE, 2500↓2000↓1500

古手「よいいけるな スキル1ツインドライブシステム！」

千冬「なにっ」

一夏「ツインドライブシステム？」

箒「なんだそれは？」

千冬『管制室にあるから、みてこい』

管制室

一夏「ついた」

箒「どこにあるんだ？」

一夏「これか」

箒「どれだ？」

一夏「ツイン・・・ツイン・・・あったこれか」

箒「えっと・・・HP50%以下の場合、ブースト使用時間増加、機動、攻撃力増・・・なるほど」

一夏「ブーストと機動攻撃力増という事か」

アリーナ

ガギン

千冬「（ツインドライブシステムで機動力、攻撃力があがったか）」

ガギン

千冬「はっ！」

千冬が垂直にブレードを振る

が古手は左回りに回転し千冬のCEを削るに

800↓100

古手「じゃあこれで終わらせて寝るか 行きますよ？ 織斑先生？」

千冬「ああ、」

ガギンガギン

千冬は連続技のように匠に剣を振る

千冬「!ここだっ!」

千冬の剣が古手のCEを0にさせようとした時

古手「ところがギツチョン!スペシャルアタック発動!」

千冬「なんだと!」

そのとき千冬の打鉄が固まった

一夏「何だあれは!」

箒「必殺技・・・スペシャルアタックと言ったな・・・
一定距離をダッシュして1つの敵に攻撃を加える必殺技です。
必殺技発動中には敵の攻撃を受けない無敵モードになります
ほかにも全弾発射型必殺技、マップ兵器型必殺技
があるそうだ発動にSPゲージ100?必要・・・だそうだ」

一夏「すごいな」

2つの0の光がダブルオーライザーの後ろに出来そこから
ライザーソードをやり最後にGNソード?で攻撃し終了

千冬のC Eを0にしたところで終了しカタパルトデッキに戻る

千冬「すごいなそのM S I Sは」

古手「多分この世界最強だとおもいますよ」

千冬「ふっ・・・そうだな」

一夏「すごいな古手！千冬姉に勝っちゃうなんて」

箒「そうだな」

古手「いや、この機体のおかげだよ」

一夏「なあ、俺達にもスキルって使えるのか？」

古手「んーできないことはないんじゃない？
ただ織斑先生とか国がなんていうか・・・」

千冬「ああ、それなんだが・・・」

古手「？」

千冬「お前のM S I Sは所属国家はない」

古手「なるほどねオバテクすぎるからね」

千冬「そういうわけだ」

古手「まあでもスキルのやつを教えたら崩壊するからだめだな」

一夏「えー」

古手「アキラメロ」

一夏「わかった」

古手「そうだ、織斑先生」

千冬「なんだ？」

古手「明日整備室借りてもいいですか？」

千冬「良いがどうするんだ？」

古手「ハロ作ります」

千冬「ハロ？」

古手「ハロ」

千冬「どういうものだ？」

古手「まあ和むかな後は回避運動などMSのサブパイロットから専属の小型ロボットによるメンテナンス活動など、あらゆる面をこなす独立型マルチAIとしてかな」

千冬「すごいなそれは」

古手「まあ俺の場合は和みとメンテナンスだけだけどね」

千冬「ほう・・興味深いな」

古手「織斑先生だけでしたら1こ作りますけど？」

千冬「いいのか？」

古手「まあその代わりとなんだが絶対に解体とかいじくらないでくださいね

後は生徒に持っていられないでください専用の台も作りますから」

千冬「わかった」

古手「さーて工房工房♪」

古手は自分の部屋に戻った

千冬「お前まだいたのか」

篝・一夏「俺ら（私達）を忘れないでください」（なみだ目）

そういつてみんなはアリーナを後にした

整備室でのある出来事

翌朝 土曜日

現在整備室に居るのだが・・・じっと見られてる・・・

名前は・・・確か更識さらしき 簪かんざしだっけ

古手「・・・・・・・・何か用かな？」

簪「え・・・いや・・・なにも・・・」

古手「そこに居ると気が散るんだけどね」

簪「ひゃあ・・・ごめんなさい・・・」

古手「まあみてもいいよ」

簪「・・・はあい」

古手「そういえば自己紹介まだだったね多分知ってるとおもうが
古手雅樹だ、よろしく」

簪「更識 簪・・・です・・・」

古手「どうもよろしく」

簪「何作ってるんですか？」

古手「ハロ」

簪「ハロ？」

古手「ああ・・見てみればわかるよ」

簪「うん」

赤ハロ「ハロ！ まさきヨロシクネヨロシクネ」

古手「できた」

簪「すごい・・これがハロ・・」

古手「ああ、こいつがハロだ」

簪「何で作ったの？」

古手「こいつには回避運動などMSのサブパイロットから専属の小型ロボットによる

メンテナンス活動など、あらゆる面をこなす独立型マルチAIとして使う

モチロン演算とかも出来る」

簪「そう・・・なんだ・・・（ハロの演算とか使えば・・・）」

赤ハロ「ヤメテーヤメテー」

古手「そうだな後もう1個作って
ついでに機体整備でもするか」

黒ハロ「ハロマサキヨロシクネヨロシクネ」

古手「できたティエリア」

ティエ「何だ？」

古手「ダブルオー展開」

ティエ「了解ダブルオー展開」

古手の周りが光りだしてダブルオーになる

簪「・・・ダブルオー・・・」

古手「さーてどこからやろうかな」

そうすると古手はダブルオーから降りてパソコンをカタカタさせる

簪「これが・・・ダブルオー・・・」

古手は簪のつぶやきをスルーしパソコンをカタカタさせる

古手「大体このぐらいかな」

赤ハロ「ハロマサキジカン、マサキジカン」

古手「まじかもうこんな時間か それじゃ」

赤ハロ・黒ハロを持って整備室を出る

古手はそうすると片付けて整備室を後にする

古手「それじゃ 赤ハロいくよ」

赤ハロ・黒ハロ「バイバイ、バイバイ」

簪「……はじめての人に声かけられた……」

職員室

千冬「これがハロか……」

黒ハロ「チフユ ヨロシクネヨロシクネ」

職員室に居る周りの先生が驚く

古手「これが専用の台です」

赤ハロ「ヨロシクネヨロシクネ」

古手「じゃあ渡しましたよ黒ハロ」

千冬「ああ」

古手「委員会にも行ったらそれ自爆しますから」

千冬「なんだと！」

古手「冗談ですよ」

その日の夜

自室でパソコンをカタカタやってるが

やけに騒がしい

古手「なんか騒がしいな」

古手は廊下に出ると鈴が居た

古手「どうした？」

鈴音「なんでもない・・・」

古手「（そういえば原作でケンカのシーンあったな）」

それを思い出した古手

古手「鈴音良い事教えてやる」

鈴音「？」

古手「一夏にこう言え、クラス対抗戦で勝ったら1つなんでも言う事、ってな」

鈴音「！・・・そうねその作戦イタダキ」

古手「じゃあ俺は寝るからあまり騒がしくするなよ？」

鈴音「わかってるわよ」

ボタン

古手「さて原作どおりに進めばいいけど」

ティエリア「そうだな・・・」

こうしてクラス対抗戦の日を迎える

クラス対抗戦

クラス対抗戦 当日

アリーナは漠然と盛り上がっていた
しかし古手は学園の屋上に来ていた
なぜなら古手は束から送られてくる
ゴーレムを待っていた。

屋上で古手はモニターをみて一夏の試合を見ていた

古手「おー一夏がんばってるじゃん」

ティエ「ああ、そうだなあそこで回避していればまだいけるとおも
うのだが

鈴のIS 甲龍（シェンロン／こうりゅう）の衝撃砲で手間取って
るようだ

古手「まあいけるとおもう」「ピピピピピピピピピピ」来たか」

ドゴーン

古手「アリーナのシールド壊したらいくよ」

ティエ「了解 機体は？」

古手「いつもどおりで」

ティエ「わかった」

アリーナ 一夏・鈴サイド

鈴「今すぐに「手加減してください」って言えば手加減してあげてもいいよ」

一夏「それだと意味がない、俺の本当の実力を見ておきたい」

鈴「そうなんだ、わかった本気でいくよ!」

ランプが3つ消え開始のランプが光る

鈴・一夏「はああああああ」

それと同時にブーストをかける

鈴「あまいね!はっ!」

鈴からの右ストレートが入る

一夏 C・ E1400 ↓ C・ E1000

一夏 「400も削られた！」

一夏 「このっはああっ」

一夏の剣(雪片二型) が鈴の脇へと入る

鈴 C・ E1400 ↓ C・ E900

鈴 「やるね一夏！」

一夏 「鈴もな！」

2人が同時に接近戦をかけようとしたとき

ドゴーン！

一夏 「なんだ！？・・・っ！鈴危ない！」

ひゅん

一夏は鈴を抱えて回避する

鈴音 「ちょ！いつ一夏どこ触ってるのよ！それと何よあれ！」

アリーナ管制室

千冬「2人ともデッキにもどれ！先生方がそっちに行く」

一夏『観客の退避時間を稼ぐそのうちに早く！』

千冬「・・・わかった死ぬなよ？」

アリーナ中央

相手2機いて1機がビームを放ち移動する

ビュン！

一夏「こいつは・・・」

鈴音「ビーム！」

レーザーとは違いビームは一撃で半分以上も削られる
しかも相手の装甲も解ける場合もある

そしてズドンという音が聞こえた

一夏「何だこのおとは？」

鈴音「一夏あれ見て！」

そこには・・・ガンダム顔の黒い機体が出てきた

その機体は指とか口とかからビームを出す

ビュンビュンビュンビュン

一夏と鈴音は回避して時間を稼ぐが

そこに1本のビームが放たれようとした

そのとき

バリー

ドッカーン！

上から5本のビームが降ってきた
そのビームは黒い機体に当たる

一夏「な・・・なんだ！」

鈴音「わからない・・・」

一夏「・・・っ！鈴あれ見ろ！」

鈴は一夏の指差した方に目を行く

鈴音「っ！あれは！」

鈴・一「「フリーダム！」」

そこにはフリーダムがいた

校舎屋上

古手「アリーナシールド破壊確認ティエリアいくよ」

ティエ「了解 ZGMFX10Aフリーダム」

古手「久々の武力介入だ本気で行く」

ティエ「了解」

ズドーン

古手はソラからアリーナ上空に向かう

古手「最初にアリーナのシールドを壊す！ハイマツトブルバースト
！」

ティエ「チャージ完了」

古手・ティエ「うおおおおおおおおおお」

ズドドドーン

バリーン

古手「開いた穴から突入する！」

一夏「なんてビームなんだ！」

鈴音「てかなんでフリーダムがここに！」

千冬『おまえら！デッキに戻れ！』

管制塔の千冬から通信が入る

一夏「でもまだ非難が」

千冬『大丈夫だ後はあいつがやる』

鈴音「あいつって・・・フリーダム?!」

鈴はなにかわかって話した

千冬「ああそうだいいから戻れ」

一夏『・・・わかった鈴もどるぞ』

鈴音「まだあいつが!」

一夏「鈴!」

鈴音「・・・・・・・・」

2人はデッキに戻った

古手サイド

古手「2人はデッキに戻ったか」

ティエ「まさかここに現れるとはな・・・」

古手・ティエ「サイコガンダムとデュエルガンダム・・・」

両者にらみつける

古手「しかも両方ともA Rランクだぜ・・・」

ティエ「ステータスは・・・基本のままらしい」

古手「なら問題はないかなどうせ無人機だし」

ティエ「無人機かなら問題はない」

古手「行くよ、ティエリア」

ティエ「了解」

ドーン

古手はいきなりレールガンを放ち勢いよくブーストをかける

次にビームライフルでけん制しながらS Pをためる

1段階S Pたったところでスキル1のフェイズシフト装甲を発動する

相手も反撃するがすいすい避けられてしまう

そしてSPゲージが満タンになったところ
相手はまだHPゲージが残ってるらしい

古手「そろそろ決めるか」

ティエ「ああそうだな」

古手「スペシャルアタック発動！」

古手はサイコとデュエルASをまとめてやるそうだ
アサルトシュラウド

2機の間にはオレンジ色の球体が出る

2機は固まってフリーダムからのハイマッドフルバーストを食らう

ズドーンズドドドドドドドドド

2機は爆発して砕け散ったゴーレムは先生たちがやったらしい
そこに千冬から通信が入る

千冬『おいフリーダムのパイロットそこにあるカタパルトデッキに
来い』

と言って通信をきられた

古手「だってさ行くしかないか」

ティエリア「ああそうだな」

カタパルトデッキ

一夏「すげえ・・・あれがフリーダム・・・」

鈴音「白騎士事件のときに居たIS」

千冬「スピード・攻撃力・防御力・反射能力・フリーダムはすごいな」

一夏「千冬姉！」

ゴッソ！

千冬「織斑先生だ馬鹿者」

一夏「いてて・・・」

鈴音「こっちにくる」

鈴は身を構える

千冬「大丈夫だ、あいつは見方だ」

鈴音「それはどういう・・・」

ズシン

フリーダムがカタパルトデッキに着くそして3人のところへ向かう
そして一夏を中心に正面に立つ

千冬「お前らこの顔に見覚えはないか？」

一夏「顔？だって白騎士事件のときに居たフリーダムだよな？」

鈴音「うん、そうだね」

千冬「織斑、ほかに覚えはないのか？お前は1回戦っかてはあるぞ」

一夏「そうなのか？！」

鈴音「わからないらしいです」

千冬「・・・しょうがない顔はずせ」

そういつて顔のところを外す

一夏「あ！ふ・・・古手じゃないか！」

鈴音「ちよっと！何やってるのよ！」

古手「何ってww見てのとおりだよ」

千冬「まあこれで白騎士事件の片割れが判明したわけだ」

一夏「と言う事はお前俺よりか先に動かしてたってことか」

古手「そうだけど公式だとお前が先だ気にするな」

千冬「さて私と古手はちよっと話があるのでな
このことは話したらどうなるかわかってるよな？」

一・鈴「ハイ・・・」

しかしすぐにはれるのは時間が早かった

取調室（前書き）

最後に機体の紹介をしようとおもいます W
古手が持つてる機体など紹介していきますのでマッテテネ W

取調室

学園地下30メートル レベル5

千冬「さて、聞きたい事はわかってるよな？」

古手「そうですね、じゃあこの機体サイコガンダムから」

千冬「サイコガンダム・・・」

古手「まあこいつをみてくれ」

古手はディスクを入れモニターをつける

千冬「こいつは・・・さっきの黒いやつか・・・」

千冬はモニターを見てサイコガンダムを見る
ついでにティエリアも呼ぶ

古手「はい、こいつはサイコガンダムこいつは今回スキルは発動なかったのですが」

説明しておきます」

千冬「ああ」

古手はモニターにサイコガンダムのスキルを表示させ説明する

古手「まずスキル1のIフィールド（アイフィールド）
こいつはビーム系など軽減する大体75%ぐらい」

千冬「なるほど高いなそれに対抗できる我々の機体は？」

千冬は軽く考え質問をする

ティエ「デュノア社製ラファール・リヴァイヴ」

ティエリアは即答をした

千冬「というと実弾系か」

古手「正解 実弾には弱い 俺が使ってる機体で実弾持ちはこいつだ」

古手はある機体を表示させる

千冬「何だこいつは？」

古手「ガンダムヘビーアームズ改（EW）だ　織斑先生ステータスを見てください」

古手は指し棒を持ち千冬にステータスを見るように言う

千冬「攻撃力がちよつとあるのと防御が高いのにしか見えないのだから？」

ティエリア「まあまあ『変形前』はそうだな」

千冬は『変形前』と言う言葉に反応したが武装を見る

千冬「武器は・・・なんだ武装がほとんど射撃しかないじゃないか」

古手「変形後はすごいことになりますよ　ポチットな」

ヘビーアームズが変形後になる

千冬「げっ・・・こいつは・・・」

古手「先生こいつの別名わかります？」

古手が千冬に質問をした

千冬がヘビーアームズを見る

千冬「歩く弾薬庫だな」

古手・ティエ「正解」

古手「さて、話を戻すけどこいつは格闘アーマーがある」

千冬「格闘アーマー？それはなんだ？」

ティエリア「格闘アーマーは例え相手から格闘とかやっても反撃は可能ってやつだ
例に例えると格闘で挑んでもやり返されるだけってことだ」

千冬「なるほど」

古手「まあそれがさっき教えた変形後のヘビーアームズ改にあるってわけだ」

千冬「ということは変形したら弾切れ起きるまで射撃続けるってことだな？」

古手「正解、まあ弾のリロードがあるからちよつとしたらまた撃ち続けるけどね」

千冬「なるほど」

古手「さて次なんだが スキル2鉄壁EX これが厄介だ」

千冬「その名のとおり硬くなるのか？」

ティエリア「そうだしかも防御力は元々高いからめんどくさいが、ヘビアEWには鉄壁」

ついてるからヘビアは大丈夫だが」

千冬「こっちが持たないと」

古手「そういうことださて次の機体だが」

千冬「デュエルガンダムと言ったが」

古手「ああ、デュエルガンダムそして外の武装がアサルトシュラウド・・・」

千冬「覆うもの死体を包む衣 か」

古手「これを俺はデュエルガンダムアサルトシュラウドと読んでるそのまんまだけどな」

千冬「こいつをなんていうんだ？」

千冬は方のレールガンを目指す

ティエリア「そいつはレールガンの シヴァ です、反対側にあるのはミサイルポッドだ」

千冬「ほうこれはすごいな」

古手「デュエル^{アサルトシュラウド}ASの基本武装は

右手にビームライフル

左手にアンチビームシールド

後は顔のところにイーゲルシュテルン・・

簡単に言うとか威嚇射撃とかに使うやつバルカン

背中にはビームサーベル2本・・

スキルは老練なスナイパーと精密射撃

使えるのはビームライフル・サーベル・シヴァの3つ

ちなみにデュエルがGATシリーズの中のベースになった機体です」

千冬「GATシリーズというのは？」

古手「シリーズの機体は合計で5機

まず1つベースのデュエル主に格闘がメインかな」

千冬「白兵戦が基本か」

古手「そして次にバスターガンダム、バスターは射撃に特化した機体です」

千冬「射撃専門か」

古手「そうですね次にブリッツガンダム」

千冬「ブリッツ・・電撃か」

古手「はい、ブリッツは曲者ですねスキルはフェイズシフト装甲とオートロックオンジャマーEXですね」

そして曲者の理由はミラージュコロイドとオートロックオンジャマ
ーEXこれがメンドクサイですね」

千冬「オートロックオンジャマはわかるがミラージュコロイドは
何だ？」

ティエリア「ミラージュコロイドは3分から5分消えることが出来る
ちなみに古手のデスサイズヘルとは違うシステムを使ってる」

千冬「そのシステムは？」

千冬は古手の方を向き問う

古手「言えませんかこれは」

千冬「・・・わかったそれで次は？」

古手「次の機体はイージスガンダム」

千冬「イージス・・・ギリシャ語だと防具か」

古手「そうですね、イージスのスキルはSEED覚醒とフェイズシ
フト装甲

そしてイージスには今までとは違う機能があります」

千冬「その機能はなんだ？」

ティエリア「・・・変形システムというやつだ」

千冬「変形システム？」

古手「こいつはM A・モビルアーマーに変形が出来るんですがその代わり
防御力が低くなりますしかし変形したおかげでスピードが上がりま
す」

千冬「あたればどおってことはないという機体か」

古手「まあそうですねそして最後の機体ストライクガンダム・・・」

千冬「ストライク・・・攻撃か」

古手「そうですね、ストライクのスキルは機動力アップとフェイズ
シフト装甲

・・・しかしストライクには最大の特徴、ストライカーパックシス
テムがあります」

千冬「ストライカーパックシステムか」

古手「はい、ストライカーパックにはエール・ランチャーソードの
3つ

そしてそのストライカーパックごとにスキルも変わります」

千冬「なんだと！」

ティエリア「エールストライカーには中距離の装備

ビームサーベル・ビームライフル・バルカン

スキルはリロードアップとフェイズシフト装甲・・・ですがエールに
はもう1つ別があります」

千冬「別に機体があるのか？」

古手「はい、ムウ・ラ・フラガ専用エールストライクガンダム
これはその機体の名前ですね

こいつにはバルカンの変わりにバズーカが装備されています
そしてスキルはフェイズシフト装甲・・・そしてユニークスキル・
エンデュミオンの鷹」

千冬「ユニークスキル・・・か」

古手「ええユニークスキルはたとえば
俺の機体デスヘルハイパージャマーECMというスキルみたいな感
じですね」

千冬「なるほど」

古手「ユニークスキルも全てあの中に入ってるので後で確認を」

千冬「わかった」

古手「じゃあストライカーパックの続きですが

次にソードストライカー名前のとおり接近戦装備足から頭ちよつと
上ぐらいの

対艦刀・とブーメランだけです。が野球のスイングみたいな振り方な
のはメンドクサイです

理由はそれを受けるとブーストダウンをします。ブーストダウンする
と緊急回避みたいなのが

5秒から10秒できなくなります。そしてブーメランにはスローの効
果があります

スローはちよつとづつ動く効果は3秒」

千冬「厄介だな効果というものは」

ティエリア「そうだな、そして最後のストライカーパック ランチャー
ストライカー

ランチャーはその名の通り遠距離型でスキルは防御力アップとフェイズシフト装甲

肩にバルカンがあります。移動射撃なら10セット停止射撃なら3セット

そしてアグニには貫通属性、貫通属性は変形後のイージスにも付いています

まあアグニは1発しか撃てないのでリロードが7秒ですが外部電源繋げると

連射は可能ですが攻撃力は高い方ですがシールドがないため防御力が低いですね

本当に後方支援型に作られたやつですだから」

古手「以上が説明と報告です」

千冬「そうか・・・わかった、そういえばフェイズシフト装甲と言うのは何だ？」

古手「スキルにも持っていますが・・・まあいいか
フェイズシフト装甲は実弾に対する防御力が上がります」

千冬「なるほど・・・ありがとう」

古手「さて・・・」

古手はそういうとネックレスをデュエルガンダムとサイコガンダムに向けた

そうすると2機は消え古手の機体倉庫の中に入れられた

千冬「!何をする」

古手「この2機を委員会に報告するとバランスの崩壊が待ってますから
それを回避したまです

千冬「わかった、だがどうする? あっちには見られてるが?」

古手「そしたら委員会にこう言っておいってください
「この機体は私が預かりますこれは私に与えられた仕事なんで」と
ね」

千冬「その仕事とは何だ?」

古手「言えませんがどうせ信じてはもらえないから」

千冬「お前が言いたくなければそれでいい」

古手「ありがとうございますお礼とは言いませんがお約束のレッド
フレームです」

そうすると古手は赤い小さい刀のキーホルダーを千冬に渡した

千冬「ああ、ありがとう」

古手「じゃあ私はこれで」

そうすると古手は地上に行くエレベーターに向かった

取調室（後書き）

こんにちは作者です W W おまたせしました W W

そしてとうとう勝手に機体やらかした W W

千冬専用レッドフレーム

外見武装は通常のレッドフレームと同じだが

スキルのみ違う

スキル 1 機動力アップ

スキル 2 ユニークスキル（未定だが攻撃力アップ系）

サポートでハロにも装着可能

ハロに装着させるにはハロと一緒に I S 起動ということで W

次回から古手が持つてる機体を教えちゃいます W W

バレタ 自由の機体

さて事情聴取も終わったところで
寮の食堂に戻ってきたのだが・・・

古手「視線が痛い・・・」

四方六方八方から視線が飛んでくる

古手「なんだなんだ？」

わけがわからない
そして偶然ご飯食べてる一夏と箒を見つけた

古手「お、一夏と箒みつけ、なあ一夏」

一夏「げっ・・・お・・・おう古手どうした」

古手「なあ四方六方八方からの視線が居た痛いんだけどWWW何で？」

古手は笑いながら言うがしかしそこで予想外の爆弾発言が来る

一夏「あのさ・・・古手・・・」

古手「んー？」

古手はそーい！お茶を飲んでる

一夏「お前がフリーダムに乗ってる事バレタらしいぞ」

(o、ーωー、)・*；ー、ブツ ↑古手

古手「ゲッホゲホWWWまじかよWWWはえーなおいWWW」

箒「ああ、私達がここに着いたころにはもう」

古手「まあ大体わかってるのが1名いるけどな」

そうすると古手は入り口にある近くの窓に行った

そこには2年の新聞部の1人 黛 薫子という人物が居た

古手「一夏こいつが犯人」

一夏・箒「あー・・・」

黛「あのー・・・私って大変な事しちゃいました？」

古手「うん・・・そうだね・・・ある意味国家機密ほどの大変な事だね」

と言いながら古手は今にもため息が出そうな顔で言う
そして古手はケイタイを取り出す

p p p p p p p p

古手「もしもし織斑先生ですか？」（黛が逃げようとする）

千冬『どうした？』（古手が服を後ろからガシッと持つ）

古手「自由の事ばれました」（薫はじたばたしてる）

千冬『・・・わかった』（古手は近くにロープがあるから一夏にパシリする）

古手「それで今ばらした犯人今捕まえてるんだけど、
どうすればいいですか？」（一夏がロープをとってくる）

千冬『今からそっちに行く』（古手はぐるぐる巻きつける）

古手「了解」（拘束終了）

ぴっ

古手「と言う事だ聞こえたよね・・・先輩？」

黛「コクコクコク」

古手「じゃあおとなしくしてくださいね」

4分後

千冬「こいつが犯人か」

古手「そうですね」

千冬「時期にバレルとおもったのだが早すぎるな」

古手「そうですね このおとしまえどうしよっかな」

薫子「命だけはお助けを・・・」

古手「まあフリーダムだけならいいが俺の顔が写ったらいけないよね
言いたい事わかってるよね？」

薫子「・・・ハイ」

千冬「さて・・・大変な事になってしまったな古手」

古手「しょうがないですよ時期にこうなる事はわかっていますから
しかし・・・」

千冬「ああ・・・」

古手「多分俺の予想なんですが絶対に俺の機体を盗もうと考える人
がいつぱい来ますから
対策考えないとな・・・」

千冬「そうだな・・・」

そこで古手がひらめいたようだ

古手「織斑先生　この学園のどこかに俺専用の工房作っていいです
か？」

千冬「バレナイところがあるのか？」

古手「ここですね」

千冬「なるほどそこなら大丈夫だな」

古手「じゃあ、この後はお任せしますので」

千冬「ああ、わかった」

こうして自室に戻った古手であった

夢の中

古手「あれここは・・・」

神「よっ」

古手「おー神様おひさーw」

神「大丈夫のようだな」

古手「とりあえずは生きてる」

神「そうかまだSEEDとかはつかつとらんみたいだな」

古手「まあとりあえずな、多分これから使うとおもう」

神「そうか・・・まあこれからが大変だぞ」

古手「了解 あれだろこれ下手したらゲーム内の全機体出てくるんだろ？」

神「そうじゃなそれを回収してもらえればいいのじゃ」

古手「まあ何とかなると思うがM S I Sの装甲とかをI Sにできるようにして

あと全てのストライク系統と全てのストライカーパックはこっちの手持ちにして

ついでに専用の工房も」

神「しょうがないやつじゃのうこれ以上はないと思え」

古手「了解」

神「じゃあまたのー」

p p p p p p p p p p

カチッ

古手「・・・もう朝か」

ティエリア「おはよう」

古手「おはようさん」

古手は制服に着替えてバックを持ち食堂に行く

古手「おはよー鈴音・一夏・箒」

3人「おはよー」

古手「やっぱ昨日の今日だから視線がいてえ・・」

箒「しかたないだろう」

一夏「ああ、しかたないな」

古手「・・そうだな」

ティエリア「古手、ストライク系統の機体が使えるようになった
後工房も出来てる」

古手「了解ー」

一夏「なあハロってなんだ？」

ティエ「ハロは回避運動などMSのサブパイロットから専属の小型
ロボットによる
メンテナンス活動など、あらゆる面をこなす独立型マルチAIとし
て使う
モチロン演算とかも出来るやつだ」

一夏「聞いてみるだけだとすごそうな機械だな」

古手「いや、案外かわいいものだよ」

一夏・箒・鈴音「かわいいもの？」

古手「見てみるか？」

3人「もちろん」

ガサゴソガサゴソ

古手「ホレ」

ハロ「ハロハロ イチカ ホウキ インリンヨロシクネヨロシクネ」

そこら辺に居た近くの人「か・・・かわいいいいい！」

古手「うわっ W W W」

「ねえねえこれ古手君が作ったの？」

「うああ・・・かわいい W W W」

「かわいい物には罪にはならない！かわいいは正義だ」

古手「やべえ・・・じゃあ一夏達俺は先に」

一夏「おう、またな」

古手はハロを回収して教室にいくのであった

山田「今日は転校生を紹介します今回は2人です」

千冬「入れ」

ガラッ

(○。エ。)。・；・、ブッ ↑古手

「へっ?・・・ま・・・雅樹!？」

古手「おま・・・シャル・・・なんているの?ww」

千冬「なんだ古手、シャルル・デュノアと知り合いか？」

古手「シャルル・・・ハイ知り合いですww」

千冬「ならちようどいい、デュノアはお前と相部屋になるお前が面倒見てやれ」

(; ^ ω ^) . . .

古手「マジでいってるんですか？」

千冬「ああ、マジだ」

古手「・・・了解」

千冬「デュノア挨拶だ」

シャル「シャルル・デュノアです、まさ・・・古手君と一緒にもう1人男性で動かせると聞いたので」

「え？男？」

シャル「はい」

そこでシャルは古手のほうを向いた
古手は耳をふさげと動作した
シャルは同じことをした

「」「「キャアアア」「」

「3人目よ3人目」

「美男子3人目かー」

千冬「おい静かにしろ馬鹿者」

静かになったさすが千冬先生

千冬「次ラウラ自己紹介してやれ」

ラウラ「分りました教官」

千冬「今は織斑先生だ」

ラウラ「わかりました」

ラウラ「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

古手「それだけ？」

ラウラ「以上だ・・・お前が織斑一夏か」

一夏「ああそうだが」

そこに一夏の頬に振ろうとしたがされなかった

パシン

古手「ラウラ・ボーデヴィツは何をしている」

ラウラ「それはこっちのセリフだが？」

古手「俺はお前が一夏にビンタしようとしたのを先読みしてとめた
だけだが？」

ラウラ「ッ！・・・キサマ何者だ？」

古手「・・・3年ぐらい前か・おまえドイツの戦場で1回やられそ
うになったな」

ラウラ「・・・それがどうした」

古手「そのときは4対1の時だったな・援軍はまだ来ない
お前は右肩のレールガンをぶっ放すが当たらないそこにミサイルが
1本・・・

飛んできてアボーン・・・にはならなかった」

ぶんっ

ラウラは古手の手を振り払う

古手「そこに1機の機体が上から来る何だと思う？」

ラウラ「・・・フリーダム」

古手「ああそうだそしてそのパイロットが目の前に居る・・・」

千冬以外全員「!？」

古手「いやお前ら昨日知っただろ？」

ラウラ「あの時の援護は感謝するしかしこれは別だ
私はあの人の弟としていることを認めない」

そういつてラウラは席に着いた

千冬「はぁ・・・さてSHRをはじめる今日は――」

千冬「――ということだこれでSHRを終わる

シャルル「あ、織斑くんだっけ僕は・・・」

一夏「ああちよつとまった1時限目はそとだから俺らはアリーナで
着替えないといけない」

古手「ああ女子が着替える前に行くぞ」

古手「さて一夏・シャル　ダッシュで行くぞ」

一夏「ああ」

古手「こっちだ」

シャルルの手を引っ張る

シャルル「う・うん」

古手「げっ・・やっぱり来るか」

「あ織斑君と古手君と転校生だ」

「居たぞ者度もであえであえ」

ここはいつから武士の家になった・・・

古手「しょうがない一夏こっちだ！」

古手はシャルルをお姫様抱っこする

一夏「ああ」

古手「背中のやつだけ展開しろ」

「キャアアア」

「お姫様抱っこよお姫様抱っこ」

「フフフ・・・今月新作はこれね」

古手「さて・・どうにか逃げれたが間に合うかぎりぎり」

一夏「ああ行くぞ、間に合わなくなる」

古手「1時限目からさすがにたたかれたくないな」

一夏「ああそうだな」

シャルル「／／／／／」

顔真つ赤にするシャルル

古手「ああすまんもうちよつとの我慢だ」

シャルル「う・・・うん」

第3アリーナ更衣室

一夏「ぎりぎりかな」

古手「ああそうだなシャルルは反対で着替えろよ」

一夏「このスーツ引っかかるんだよな」

シャルル「ひ・・・ひっかかる・・・／／／／／」

古手「ナに考えてたのかな ニヤニヤ」

シャルル「な・・・なんでもないよ!」

古手「さて着替え終わった事だし行きますか」

シャルル・一夏「うん「おう」」

千冬「今日から実践的に行う セシリア・凰 鈴音 前に出る」

まあ見世物じゃない事はわかってるな

そして・・

セシリア「この私イギリスの代表候補生のセシリア・オルコット
がお相手しますよ」

鈴音「代表候補生の实力を見せてあげるわよ！」

やっぱ物に釣るよな本当に・・

千冬「何か言ったか古手？」

古手「イイエナンデモアリマセン」

セシリア「お相手は誰ですの？」

千冬「相手は・・・」

「ひゃあああああああああああ」

一夏「おわあああああああああっ」

ドゴオオオオオオオオオオオオオ

一夏「むっ……」

山田「織斑君……織斑君そろそろどいてもらわないと……いやこのままでもいいのですが……
やっぱり先生と教師は……」

セシリア「あらあらはずしてしまいましたわ」

鈴音「いーちーかー」

びゅん

双天牙^{そうてんがげつ}月を投げるが

ドンドン

山田「織斑君怪我はないでしょうか？」

一夏「え……ええ大丈夫ですありがとうございます」

千冬「まあそれはともかく山田先生おねがいます」

鈴音「2対2のほうが良いじゃないの？」

セシリア「そうですわねそれだとフェアじゃありませんわ」

一夏達の授業はまだまだ続く・・・

バレタ 自由の機体（後書き）

作者 さて今回紹介する機体はこちら

デデン

フリーダムガンダム

スキル1フェイズシフト装甲

対実弾防御力アップ

スキル2Nジャマーキャンセラー

ブースト無限上に上がるときだけブースト使用

武装

1 ビームサーベル

2 ビームライフル

3 腰の折りたたみレールガン

4 スペシャルアタック

武装はこのぐらい

され、では次回またお会いしましょう

ガチャポン製造会社モルゲンレーテ

さて・・・授業が終わり
俺とシャルは自室にいる

古手「大体の想像が出来てる
どうせ上からの命令だろ
俺と一夏のデータをとって来いってね
しかも見てたらしいな前回の試合」

シャル「・・・そこまでわかってると気が楽になるよ」

古手「はあ・・・だと思ったよ」

古手はため息を吐きつつ言う

ティエリア「だがこれからはどうする？」

シャル「たぶんばれたから独房入りかな」

シャルが下を向いた瞬間古手はみよんな事言い出す

古手「ティエリアとシャルにいい事教えてあげるよ
この学園の特記事項二十一よんでみ」

シャルロット「え？確か「特記事項第二十一、本学園における生徒はその在学中において

ありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意が無い場合、

それらの外的介入は原則として許可されないものとする」ってまさか」

古手「ああそうだこの学園さえ居れば3年間は居る事が可能だ」

ティエリア「よく思い出したな」

古手も今さっき思い出したところだ

シャルロット「よく覚えられたねあれ55個もあるのに」

古手「色々あるんだいろいろ」

シャルロット「古手君　ありがとう」

古手「お・・・おう、さ・・・さてお前が来たってことは今月があれか」

シャル「今月って何かあるの？」

古手「学年別ダグトーナメント」

シャル「あれ？あれって個人じゃなかったっけ？」

古手「後からタッグに変わるよ」

シャル「へー」

古手「さてと・・ティエリア、初代ガンダムとCランク5機作を作っておいてくれ

中身は初代系でスキルは着けなくて良い」

ティエリア「？ 別にいいが何をするんだ？」

古手「デュノア社と交渉してくる」

シャル「ええええええ！」

ティエリア「なぜ交渉をするんだい？」

古手「3年間はあつという間だしかも俺のデータを取ってるのならば俺が使ってたと言う意味で興味が沸くと思う」

ティエリア「そうだが・・いいのか？」

古手「スキルをつけなければ問題はない、
なに、あれでもオーバーカスタムEXにすれば
第2世代のリヴァイヴと互角以上に戦えるさ
まあEXにさせるのがどのくらい時間掛かるかな」

シャル「ガン・・ダム・・」

古手「どうした？」

シャル「ねえ、古手のISって誰が作ったの？」

古手「俺の自作だが？」

シャル「ええええええ！古手ってISのコア作れるの？」

古手「んー俺のはISって言ったらISなんだけど本当は違うんだな」

シャル「へ？」

古手「俺の系統の機体はバッテリー・小型の核・GNドライブ・ISのコアの4つに分かれてるまあ大半がバッテリーって考えれば良い」

シャル「そんなこと僕に言っちゃていいの？国家機密とかあるんじゃない？」

古手「ああ、俺の機体はMSISだから国家機密とかはない信頼してる人にしかはなさん」

シャル「と・・・ということは僕を信頼して？」

古手「ああ、そうだな」

ティエリア「古手、ガンダムのここのところなんだが」

古手「ああ、そこか、そこは強度はそれ以下にしてくれCEは800ぐらいで良い

Cランクは700ぐらいでいいよ後スキルは今はずけなくても良い

どうせあいつらスキルの空きスロットで何か入れるからロックはしておけ

まあ強化パーツはあけておいてやれ」

ティエリア「わかったガンダムの個数は？」

古手「1個でいいよ確立は100分の1で」

ティエリア「・・・わかった」

シャル「100分の1？」

そうするとそこに1個のガチャポンが出てきた

ティエリア「できた」

古手「ありがとな」

ティエリア「大丈夫だ」

シャル「ガチャポン？」

シャルが首をかしげる

古手「そいつにお金入れて回せばそこからCランク5体のうち1体俺と同じ系統　ガンダムタイプが入ってる」

シャル「ガンダムタイプ・・・」

古手「そうこの顔ね」

そうすると古手はフリーダムの顔だけ呼び出す

シャル「フ・・フリーダム！」

古手「そう、あの時お前とはじめてあった時助けたのは俺だ」

シャル「そうかー・・ありがと雅樹」

古手「友達が大変な目にあったら助けるのが常識それが男でも女でも関係ない」

シャルは笑顔を見せる

そしてつられて古手も笑顔で返す

古手「あ、そうどうせどこで作ったのか聞かれるからメーカー名はモルゲンレーテにしておいて」

ティエリア「モルゲンレーテ・・わかった」

シャル「モルゲンレーテ？」

古手「どっかのアニメからとった生産団体名」

シャル「へえー」

古手「あーこんな時間かそろそろねるかあ」

シャル「そうだね　おやすみ」

古手「おやすみ」

こうして2人は睡眠をとった

翌朝
AM
7時

p
p
p
p
p
p
p
p
p
p
p
p

カチッ

シャル「おはよう・・・ふる・・・て？・・・あれ？」

朝起きたら古手の姿はなかった

シャルルはトイレ・お風呂・洗面台を見に行くが古手の姿はない
シャルルは朝ごはん食べてるだろうと思い食堂に行く

シャルル「おはよー 一夏」

一夏「おはよーシャルルあれ雅樹と一緒にじゃないのか？」

シャルル「あれ？僕の部屋起きたら誰も居なかったよ？」

千冬「織斑・デュノア」

一夏「あれ千冬『ゴッソ』」

千冬「織斑先生だ、いい加減覚えろ馬鹿者」

一夏「す・・・すみません」

シャルル「織斑先生 古手が部屋にも居ないんですけど？」

千冬「そうだ、今古手はデュノア社にいるぞ」

シャルル「？（。；）エーッ」

千冬「なんかデュノア社と交渉しに行くと言って朝早く出て行った
何を考えてるんだか・・・」

シャルル（´・ω・｀） ショボーン

一夏「どうした？」

シャルル「い・・・いやなんでもないよ！ うん」

一夏「そうか、わかった」

ガチャポン製造会社モルゲンレーテ（後書き）

作者…ハロハロー

第17話見てくれてありがとうございます

とりあえず即効で書いてそくうpしたので

脱字誤字などありますがスルーってことでww

さて今回の古手が持つてる機体紹介今回はこちら

ガンダムエクシアセブンソード

1GNビームサーベル 近

2GNバルカン 中

3GNロングブレード／GNショートブレード 近 ブーストダウ
ン

スキル1 底力

体力が50%以下時、全ての攻撃がSMASH判定、ゲージ蓄積率
増加

スキル2トランザム（エクシア）

体力が60%以下時、移動速度、ダッシュ速度、敏捷性、攻撃力増加

以上です☆

今回の話が短めですがどうでしたか？感想などお待ちしております
次の話はこちらになっております

『次回予告』

デュノア社に乗り込む古手そこでかるく運命を変える出来事が起きる
デュノア社の運命はいかに

次回 転生先はインフィニットストラトス（リメイク）

「デュノア社」

シャルロットを助け出し運命を変えよ！ ダブルオーライザー！

デュノア社

デュノア社面談室

デュノア社長「それで、あなたが私に何のようかね？」

古手「私はモルゲンレーテ社であります用件は何個か・・・
1つめシャルロットを男として教育し
それでデュノアの売名と俺・一夏のデータを盗んで来いとの任務
確かに俺の機体は未知とのオンパレード・・・さて本題だ」
デュノア社長「それで・・・君がやりたい事は？」

社長を追い詰めるように言う

古手「・・・シャルロットの開放だな
シャルロットをちゃんと女としてちゃんと入学させる
データ吸出し禁止リヴァイヴカスタムはこっちでもらう
所属を我々モルゲンレーテにさせる
その代わりデュノア社に俺が使ってた機体を1つあげるよ」

条件にはそっちが優勢じゃないが・・・

どう選ぶか・・・

デュノア社長「・・・良いだろう」

やっぱりか・・・

古手「わかった、これが約束のものだこいつは俺が預かるこつちで書類が出来たら渡す」

古手はザクを見せポケットにしまう

デュノア社長「ぐっ・わかった・・・」

古手「それじゃ、私は授業があるので」

古手は面談室を出る

古手「それじゃデュノア社長失礼しました」

ボタン

IS学園昼休み屋上

一夏・箒・セシリア・鈴・シャルの5人で屋上で食事中

一夏「なあ結局どうなったんだ？雅樹のあれは」

セシリア「こちらでもわかりませんわね」

鈴「大丈夫でしょ」

シャル「いや・・・こっちでも首は縦に振らないと思うが」

キイイイイイイイイイ

一夏「な・・・なんだ？」

いきなり風が吹いてなにがわからない
何も横切っていないのにいきなり風が吹く

セシリア「き・・・きゃああああ」

箒「な・・・なんだ？」

シャル「さあ・・・？」

鈴「な・・・なにがおこったのよ？」

古手「ふう・・・ただいま」

全員「雅樹！（さん）」

そこにはディノア社から帰ってきた古手がいた

古手「あーつかれた長距離飛行はつかれるなやっぱ」

一夏「で、どうだった？」

セシリア「どうでしたの？」

古手「シャルル・・・いや・・・シャルロット・・・」

シャル「っ！・・・その名前出したと言う事は・・・」

古手「ああ・・・おのおっさんおまえじゃなく俺の機体を選んだよ」

シャル「・・・わかった」

一夏「シャルルいいのか？そんなことでお前捨てられたんだぞ」

シャル「わかってるよ・・・」

一夏「雅樹もこうなる事はわかってたんだろ？なんでこうした

古手「一夏聞け俺はシャルを自由にさしたそしてやったただけだ
そして所属を変えた」

一夏「所属を変えた？」

シャル「どうということ？」

古手「リヴァイヴの所属見てみろ」

シャル「っ！所属がモルゲンレーテになってる」

箒「なあ雅樹、モルゲンレーテって何だ？」

古手「モルゲンレーテは俺を中心とした新しい機体の製造団体と考
えればいい」

箒「っ！貴様も姉と同じような事をするのか！」

箒が竹刀で叩こうとしている

ブンガシッ

古手はそれを受け止めた

古手「待てよ俺はまだ女性しか使えないとは言っていないぜ・・・」

鈴「それどういうことよ！」

古手「・・・目の前にいるじゃんデモフライト機が・・・俺だよ」

箒「・・・わかった」

古手「さて・・・織斑先生のところに行くかシャル来てくれ」

シャル「う・・・うん」

職員室

古手「さて行くか」

ガラッ

古手・シャル「しつれいしまーす」

黒ハロ「ハロマサキマサキ」

古手「お、黒ハロ言う事は」

千冬「どうした」

古手「詳しくはこっちで」

千冬「わかった」

古手・シャル自室

千冬「ここなら大丈夫かそれでどうだった？」

シャル「・・・」

古手「あの人シャルルじゃなくて俺の機体を取りましたよ」

千冬「・・・そうか・・・」

古手「そのかわり所属をこっちにしました」

千冬「こっちに？」

古手「モルゲンレーテ」

千冬「なんだ？その名前は？」

古手「機体製造の会社名ですよ」

千冬「・・・そうか・わかった」

古手「じゃあ俺は工房のほうに行きますね」

千冬「出来たのか？」

古手「ハイ」

千冬「私も見に行くぞ」

古手「了解 シャルルおまえもな」

シャル「いいの？」

古手「お前はモルゲンレーテの社員だろ？」

シャル「う・・・うん！」

第3アリーナ ステージカタパルトデッキ下

シャル「雅樹どこにあるの？」

古手「まあみてろってティエリア」

ティエ「了解」

そうするとそこに扉が開くそして下へと続く道がある
奥へと進むとそこに厳重な扉があった

古手「さて、ここから先進む時なんだがこれが必要となる」

古手が見せたのはこれだモルゲンレーテIDカード

シャル「IDカードかな」

古手「そうだ偽造してもティエリアと俺が管理してるからすぐにばれる」

千冬「これはすごいな」

そして中に入るとおかつぱで紫の髪型でメガネかけた1人の青年がいた

シャル「え？ティエリアなんでここに？」

ティエリア「私はこのモルゲンレーテ内であつたらこのように人前で出れるようになる
理由は教える事は出来ないのだが」

千冬「なるほど・・・それで今後ろにあるやつは何だ？」

ティエリア「・・・これは」

古手「ティエリア俺が言う」

ティエ「わかった」

古手「今ティエリアの後ろにあるやつはM S I Sの機体を修理・改造など出来る機械です」

千冬「そんなことできるのか？」

古手「モルゲンレーテだからこそできるシャルリヴァイヴ貸してみ」

シャル「え？う・・・うん」

シャルのリヴァイヴをスキャンさせるとそこにはリヴァイヴが出てくる

千冬「おーすごいなこれは」

シャル「すごいすごい！」

すると隣にもう1つの機体を出現させる

それは全面灰色の機体であった
そいつは人の形をしてフルスキンである

千冬「何だこいつは」

古手「この前はなしたGATシリーズ最後の機体ストライクだ」

千冬「こいつがか・・・」

シャル「ストライクか」

古手「こいつをお前にやる」

シャル「どうして!」

古手「テストパイロットの専用の機体だよ」

シャル「僕がテストパイロット?」

古手「ああそうだ、正式機体名 GATX105 ストライク

この機体はあらゆる場面での戦闘を可能にした機体だ

まずは接近のソード 大型の艦隊刀を持つ機体方にはビームブーメ
ランが装備されてる

主に接近戦対応

次にエール こいつは機動力をアップさせ中距離に対応した機体だ
ラストにランチャー 名前の通り背中に強力なビーム砲がある

そしてこいつ最大の特徴がこの3つの武装が戦闘の状況にあわせて
戦闘が行えるって事だ」

シャル「すごすぎて何もいえないよ」

古手「じゃあこっちでフォーマットとファイフティングをさせよう専用の練習場がある」

シャル「わかった」

千冬「なら私もスキルの確認で一緒にやっても良いか？」

古手「大丈夫ですよじゃあこちらに」

シャル「あれ？織斑先生も持ってるんですか？」

古手「俺が特別に用意した機体名 ORB P02 レッドフレーム
織斑先生のは専用のユニークスキルが持ってる」

シャル「ユニークスキル？」

古手「ああそうだったなティエリア後でスキルの表を渡しておいて」

ティエリア「わかった」

古手「さてフォーマットとファイフティングやるよ」

シャルはストライクに背中を預けストライクを着る
そしてストライクのスキルを見てる

そうすると古手はパソコンを高速タイピングする

610660056060156065068589800000
89000000

0 0 0 0 0 0 0 3 9 8 6 5 0 1 6 1 8 6 1 6 3 1 6 8 1 1 5 1 9
8 1 1 + 5 1 8
3 1 6 5 1 8 6 0 1 5 3 6 0 1 5 6 0 6 5 1 6 8 1 6 5 1 6 8 + 1
6 5 5 6 1 0 6

古手「大体このくらいかな」

フォーマットとファイフティングが終了しましたと言う表示が出た

古手「よし終了だな」

シャル「うわぁ・・・」

そうするとこう表示された

ストライカーユニットを選択してください

- ・ソードストライカー
- ・エールストライカー
- ・ランチャーストライカー
- ・ストライカーなし

シャル「ねえ、ストライカーユニットを選択してくださいって表示されてるけど

どうすればいい？」

古手「とりあえず1番下のストライカーなしで」

シャル「了解」

そうするとライフルとシールドがでてきた

古手「さて武装の説明するよ武装は・・・」

古手「・・・・・・・・というわけだ」

シャル「わかった」

古手「まあ？ 着装？ カタパルトに足乗せる？ ストライカーユニット
選択？ 発進

って感じだな覚えておいてまあやってみた方が早いかな」

シャル「わかった」

古手「おっともうこんな時間か」

シャル「楽しかったから時間早いよー」

千冬「そうだな私もそれなりには楽しめたし実践練習も出来た感謝する」

古手「いいえそんな事言わないでくださいよwそうだ、織斑先生にも追加装備作らないとな」

千冬「いいのか？」

古手「こっちだとレッドフレームはいろんな装備があるんです」

千冬「わかった」

古手「じゃあ2人にこれを渡しておきますね」

2人にあるものを渡す

千冬「これは・・・」

シャル「IDカード！」

古手「カタパルト下についたらどこでも良いので手をかざしてください
さいそしたら
扉が開きます」

千冬「わかった」

古手「そうだ、シャルはまだフランスの代表候補生だから」

シャル「わかった」

古手「さてじゃあ戻りますか、ティエリア後はヨロシク」

ティエ「わかった」

デュノア社（後書き）

作者 第18話を見てくれてありがとう

こんな台本みたいな話が見てくれてうれしいですハイ・・

さて今回の機体だがこちら

デデン

ストライクガンダム

基本装備

？アーマーシュナイダー

？ビームライフル

？バルカン

スキル？機動性アップ

スキル？フェイズシフト装甲

大体このくらいですね

さて次回のお話は？

『次回予告』

来週に行われるイベント 学年別タッグトーナメント今度の相手も
油断できない

しかしそこにある異変が起きる・・・それは・・・

次回 転生先はインフィニットストラトス（リメイク）

『シュヴァルツェア・レーゲン』

魂の先に焼き付けろ！ 百式！

シュヴァルツェア・レーゲン

現在学年別タッグトーナメントの決勝

俺の頭の中だと一夏・シャルペアとラウラ・箒ペアで

そこに武力介入あると思うのだからなかった・・・

このままなく終わって欲しいのだが・・・

古手「また武力介入ですか・・・」

ティエ「・・・そうだな」

しかも今度の武力介入は軽く団体さんでした

古手「うつへえ・・・メンドクサイな」

Cランクが4機

Bが2機

Aランクが3機

古手「Cランク機体はジンにBランクにはゲイツにバウに

Aランクには葉厨トリオかよ・・・」

そうAランクの3機はフォビウン・レイダー・カラミティーの3機
がそこに居た

6日前1組教室

「今回の学年別タッグトーナメントで優勝したら古手君か織斑君と付き合えるんだって！」

（　　）。　　？（　　）。　　？（　　）。　　；（　　）。　　。
　　）

「まじで！」

「本当なのその噂？」

「なんか1学年だけらしいのよ」

「うっそだー」

と言うなどの噂が広まったのは昨日の夜中に箒が

『学年別トーナメントで優勝したら私と付き合ってもらおう！』

と言う言葉を言って近くに居たのはほんさん達が広めたのだが・

優勝⇨古手・一夏どちらかと付き合えるようになった

ということで学年別トーナメントに向けてアリーナで特訓中である

ガギンガギン

ガギン

鈴「はああっ！」

ガギン

一夏「くっそおおおおお！」

ガギン

鈴「やるね！一夏！」

一夏「おまえもな！」

ガギン

古手『おーいお前らーそろそろ休憩しろよー』

一夏・鈴「了解」

古手「さて・・・まあ大丈夫じゃね後は連続技とかかな」

一夏「そうか」

シャル「百式にはイコライザ（後付武装）がないんだっけ

古手「そういえばそうだったな」

シャル「じゃあ射撃練習してみる？じゃあこれ」

一夏「あれ？ほかの人の武器って使えないんじゃない？」

シャル「普通はね、でも所有者がアンロックすれば登録してある人全て使えるよ」

一夏「へえそうなんだ構えはこんなもんで良いのか？」

シャル「えっと・・・脇を絞めて左手はこうだね」

一夏「お・・・おう」

シャル「火薬銃だから瞬間的に大きな反動があるけどISが相殺^{そうさい}してくれるよ」

古手「じゃあターティングのマットで練習だ」

シャル「1ストック使って良いよ」

一夏「わかった」

ズドン

一夏「おおっ！」

シャル「どう？」

一夏「なんていうか・・速いな！なあシャルルの武装ってどのくらいあるんだ？」

シャル「大体20個位だよ」

一夏「まるで弾薬庫だな」

古手「あまいな俺の機体の方が本物の弾薬庫だよ」

一夏「じゃあ何個あるんだ？」

古手「俺のは胸のところで両腕にガトリングとダブルガトリング
肩にはホーミングミサイルで

腕ガトリングは12連射セット胸の方は6連射1セット

リロードは、はえーよ

そして変形してダブルガトリングと胸ガトリングの一斉射撃で
20連射できるぜ」

一夏「すごいな・・」

古手「まあそうだなじゃあ今度はこれ使ってみるか」

古手のビームライフルを渡した

シャル「大丈夫なの？」

古手「大丈夫俺のは2秒に1発撃てる普通なら壊れない」

シャル「へえ」

古手「グリップのところで握ってもう1つ握る方があるから握ってそれで撃ってみ」

一夏「わかった」

ビュンビュンビュン

シャル「速いね」

古手「そりゃビームだからよ反動もないしなこの世界だと軽くチート並みだよ」

シャル「それはやばいね」

古手「何言ってるんだい、お前にもあるだろ ストライク に」

シャル「そうだったねあははは・・・」

一夏「なんの話だい？」

古手「いや、なんでもない」

「ねえあれってドイツの第3世代じゃない？」

「うっそ！ 本当だ！」

鈴「一夏・・・」

一夏「ああ・・・」

ラウラ「キサマも専用気持ちか」

一夏「だから？」

ラウラ「私と勝負しろ」

一夏「やだね理由がない」

ラウラ「そうか・・・」

ズドン

ラウラの方からレールガンが撃たれる

古手はそうすると一夏の前に出た

鈴「バカ！ あぶない！」

ズドン

ラウラ「ふっ・・・バカがたわいもない・・・」

一夏「このやろう!」

箒「待った一夏」

一夏「離せ箒!」

古手「やれやれ・・・お前の目は節穴か? 一夏」

一夏「大丈夫なのか古手」

古手「当たり前だ俺の装甲をなめるなよ」

シャル「ドイツの挨拶ってこれがそうなんだ、いやな国だな」

ラウラ「っ!・・・お前にはわかってたまるか! 私の気持ちなど」

古手「うるせ! 力の使い方を間違ってるお前に言われたくねえ! 俺は5年前言ったはずだ! 力は誰かを守るものだ!」

ラウラ「なら、かかってくるがいい」

古手「ラウラ・ボーデヴィツヒ・・・俺をあまり怒らすなよ・・・」

先生「そこの生徒何をしている!」

ラウラ「ふっ・・・今日は引いてやろう」

古手「…………一夏大丈夫か？」

一夏「ああ、ありがとう」

古手「じゃあ、俺ちよつと工房いつてくるから」

一夏「お……おう」

シャル「あ、僕も行くよ、じゃね一夏」

一夏「またな」

古手そうすると第2アリーナのほうへ向かった

第2アリーナ下 モルゲンレーテ

古手「まあストライクもこのタッグマッチでお披露目だな」

シャル「わかった」

古手「そうだ、シャルロット専用ストライクにスキルやんなくっちゃな」

シャル「いいの？」

古手「大丈夫だ問題はない」

ティエリア「それフラグだよ」

古手「ですよー、ティエリア手伝ってくれ」

ティエリア「わかった」

古手「シャルはあそこに温泉があるから入ってきてもいいよ」

シャル「いいの?!」

古手「ああモチロンだ、いってこい」

シャル「ありがと、雅樹」

ティエリア「名前はどようする？」

古手「そうだなSEED覚醒EXプラスで
スキル2の名前はフェイズシフト装甲EXで」

ティエリア「わかった」

古手「中身は・・・と・・・をあわせた物で
スキル2も・・・と・・・合わせたやつで」

ティエリア「わかった」

古手「変形もつけて・・・」

古手は何かを思い出した

古手「そういえばデュエルガンダムASはなおったのか？」

ティエリア「ああ修理はおわってる」

古手「了解」

シャル「ふう・・・いい湯だった・・・」

温泉から出てきたシャル

古手「さて・・・お、ちょうど出てきたか」

シャル「終わったの？」

古手「ああ、ベストタイミングだな」

シャル「どれどれ・・・わっ！なにこれ！すごすぎだよこんなの」

古手「まあCE削られてもストライカーパック変えれば

CE回復するけどな（笑）

ティエリア「これはひどい・・・」

古手「じゃあとりあえず換装システムのテストやるから練習場に」

シャル「わかった」

古手「やべっ、こんな時間が夕飯なくなるな、シャル終わりにするよ」

シャル「了解」

シャル「じゃあ、行こっか」

古手「おう」

食堂

一夏「お、雅樹ぎりぎりだな」

古手「まあいろいろやってたからな」

一夏「あれ、シャルルなんかほかほかしてるな」

シャル「あ、うんモルゲンレーテでお風呂は入ってきたから」

一夏「なにっ！お風呂あるのか？！」

古手「まあな♪」

一夏「頼む！俺にも入らせてくれ！」

古手「だが、断る！」

一夏「どうしてだよ！」

古手「あそこはモルゲンレーテのIDカードもらってるやつらしか入れん

・まあ今のところ持つてるのは3人だけだけどな」

一夏「えー・・・」

古手「まあ落ち込むな　もうそろそろ大浴場で俺らも使えるからな」

一夏「どうしてわかるんだよ」

古手「そろそろ・・・」織斑くーん・デュノアくーん・古手くーん
ほらな」

山田「こんなところにいたんですか」

古手「いや今夕飯の時間ですよ」

山田「そうですね、そうそう3人にお伝えしなければあるんですよ」

一夏「なんですか？」

山田「大浴場の点検が終わったので先に3人に入ってもらおうと」

古手「ああ、俺とシャルルはモルゲンレーテで流してきたんで大丈夫ですので、という事で一夏1人では入れな」

一夏「うう・・・わかった」

山田「じゃあお伝えしましたからね」

古手「さて・・俺は戻るか」

シャルル「じゃあ僕も」

一夏「おう、またな」

古手「さて、とおれはねるよー」

シャルロット「おやすみ、雅樹」

pppppppppp
カチッ

古手「さて・・・どうしてこうなった・・・」

理由は知らない・・・だが・・・なんでシャルロットが俺のベットで寝ているのだ？そして服がはだけている・・・」

古手「シャルロット、起きろ」

シャルロット「ん・・・おはよう雅樹・・・」

古手「おはよう、で、なんでお前が俺のベットに？」

シャルロット「え？わわっいや・・・これはそのう」

古手「・・・わかったから服調えろ・・・」

シャルロット「え？・・・はっ！」

そういわれ服を調える・・・

シャルロット「・・・雅樹のエッチ・・・」

古手「おいおいそれはないだろ・・・」

一夏「おはようシャルル・雅樹」

鈴「おはよー」

セシリア「おはようございます」

箒「おはよう2人とも」

古手「おはよー一夏と箒とセシリアと鈴」

シャル「おはよー」

いつもどおりご飯を食べ教室に行き授業を受けて
いつもどおり放課後だが・

「ねえねえ今アリーナで代表候補同士と戦ってるらしいよ」

「え、本当？」

古手「・・・ねえその話本当か？」

「え・・・うんそうだけど？」

古手「・・・わかったありがとう」

シャル「え？雅樹どうしたの？」

古手「シャルル、一夏呼んで第3アリーナに行って俺は先に行く」

シャル「え？・・・うんわかった」

古手「（ちくっしょ！何で思い出せなかった
このイベントはやばい・・・）」

第3アリーナ

戦っていたのはラウラとセシリアと鈴であった

ガギン・ガギン カキン

ガシッ

ワイヤーブレードで首をつかまれる2人

セシリア「ぐっ・・・く・・・」

鈴「あ．．ぐ．．」

バリー

何か割れた音がしてそっちの方を向く

古手「ラウラ・ボーデヴィツヒ．．．俺を怒らせたな．．」

そうここに来たときは古手はSEED覚醒をしていた

そう頭の中がクリアーになりそして戦闘力が爆発敵に上がる

ラウラ「（な．．なんだこいつ！異様な殺気．．只者じゃない．．）

」

そうすると古手はフリーダムをラウラの方向にブーストを使い
ワイヤーブレードを斬った

ザッ
シュ

セシリア「げっほげほ．．フリーダム！」

鈴「雅樹なの？！」

古手「2人とも大丈夫か？」

セシリア「無様な姿を．．．お見せしましたわね．．」

古手「喋るな着たか」

一夏「大丈夫か！」

古手「2人を頼む」

一夏「わかった」

そうすると百式を使いカタパルトデッキに向かう

ラウラ「どうした来なければこっちから行くぞ」

そうするとシュヴァルツェラ・レーゲンの右肩レールガンをぶつ放す

ドン

そうすると古手はシールドも何もしないで前に進む

ドカーン

古手「どうした・・・こんなものか？」

フリーダムはフェイズシフト装甲を展開してるからなんともないが
CEがほんのちよつと効いてるだけだった

ラウラ「ぐっ・・・ならば！」

そうするとプラズマ手刀で攻撃を仕掛ける

古手「おそい・・・」

そうすると古手はクロスカウンターでラウラを殴った

ラウラ「よ・・・よくも私を・・・！」

古手「まだやるのか？」

ラウラ「はああああっ！」

ラウラは手刀で攻撃

古手はビームサーベルを引き出し攻撃を仕掛けた

しかし

ガギン！

古手「！」

ラウラ「！」

千冬「やれやれ・・・これだから子供のお守りは・・・」

古手はシールドで受け止められ

ラウラはガーベラストレートで受け止められていた

千冬「模擬戦をやるのは構わんがシールドを壊されては黙認しかねん
この勝負は今度の学年別トーナメントでつけてもらおうわかったな」

古手「わかりました」

古手はビームサーベルをしまう

ラウラ「教官がおっしゃるのなら」

ラウラは手刀をしまった

千冬「では、学年別トーナメントまで私闘の一切を禁止する。解散」

こうして古手は保健室にラウラはどこかへ行ってしまった

場所は変わって保健室

古手「お前らが命に別状はなくてよかった」

鈴「別に助けられなくて良かったのに」

セシリア「あのまま続けていれば勝っていましたわ」

古手「あのなー首絞められてごっほごっほしてたのは誰だよ・・・」

2人とも「……」

ドドドドドドドドド

古手「なんだ？地震か？」

「織斑君！」

「古手君！」

「デュノア君！」

古手「どうした？」

「「これ！」」

古手「あータッグマッチになったか」

シャルル「本当にタッグマッチになったね」

一夏「え知ってたの？」

古手「まあこっちにもそれなりの情報があるからね」

「織斑君私と組もう」

「古手君私と」

「デュノア君と一緒に」

古手「すまんなあ、俺はシャルルと組んでるから一夏は誰と？」

一夏「俺は・・・箒と組んでるんだごめん」

「先に組んでたらし方はないわね」

「そうね」

鈴「一夏！私と組みなさいよ！」

？「ダメですよ」

ドアの先には山田先生がいた

山田「あなた達のISを見たら機体のダメージレベルがCを超えています！」

当分は修復に専念しないと重大な欠陥を生じさせませんよ
ISを休ませる意味でもトーナメントの出場は認めません」

鈴「う・・・ぐ・・・」

セシリア「わかりましたわ」

という事で納得していないバカ（一夏）以外解決され
俺とシャルル（シャルロット）は自室に向かい
そして当日を迎える

さて、トーナメントだが・・

一夏が初戦とラウラに当たり

俺は決勝で当たらないとラウラとは当たらない
まあ初戦で武力介入があるから大丈夫だが

ガギンガギン

勝者ラウラ・ボーデヴィツヒ・布仏本音ペア

・・・あれ？負けた？

古手「一夏どうした負けるなんて」

一夏「油断しないで行ったんだけどすまん負けた」

古手「まあしょうがない俺が敵とってやるから」

一夏「おう、ありがとう」

シャルル「雅樹出番だよ！」

古手「了解！ティエリアフリーダム！」

ティエリア「了解フリーダム展開」

フルスキンのガンダムタイプを出した古手

古手「さてショウタイムだ

古手雅樹 フリーダム 行きます！」

赤いランプが消え緑のランプが光る
それと同時にカタパルトが古手を射出する

シャルル「（あれってかっこいいなあ僕も真似してみよ）」

シャルル「シャルル・デュノア

ラファール・リヴァイヴ・カスタム？ 行きます！」

赤いランプが消え緑のランプが光る
それと同時にカタパルトがシャルルを射出する

こうしてラウラと古手とシャルルは順々と決勝まで登っていった

古手「決勝か・・・」

シャルル「やっただね」

古手「これで決着をつける」

『さあお待ちかねの決勝戦！A側から入場してもらいましょう！
ラウラ・ボーデヴィツヒ 布仏本音ペア！』

「のほほんさんがんばれー」

「ラウラさんもがんばれー」

『続きましてB側の入場をさしてもらいましょう
注目のペア！古手雅樹 シャルル・デュノアペア！』

古手「さあ行こうかシャルロット！」

シャル「うん！」

古手「古手雅樹 フリーダム 行きますす！」

赤いランプが消え緑のランプが光る
それと同時にカタパルトが古手を射出する

シャルル「シャルル・デュノア エールストライク 行きますす！」

赤いランプが消え緑のランプが光る
それと同時にカタパルトがシャルルを射出する

「え？フルスキンが2機！」

「古手君のフリーダムはわかるけど

デュノア君のはあれは何？」

管制室

千冬「あいつめ等々出したか」

山田「出したってあれですか？」

千冬「そうだデュノアが乗ってるやつ
GAT X105ストライクだ」

山田「あれがですか作った人は誰ですか？」

千冬「古手だ」

山田「ええっ！古手君ISを作れるんですか？」

千冬「いやあいつのはISだがISではない
しいて言うのならモビルスーツインフィニットストラトス（MS
IS）だ」

山田「なるほどバッテリーですか」

アリーナ中央

ラウラ「待ちかねたぞ 古手雅樹」

古手「ああ、こっちもだ

ラウラ「じゃあ決着をつけるか」

古手「ああ」

ランプが消え 開始のランプが光る

古手・ラウラ「叩き潰す！」

開始と同時に古手とラウラがブーストで前に突っ込む

古手はビームサーベルを持ち攻撃を仕掛けるが

古手「A I Cか・・・」

ラウラ「これで動けまい」

そうして右肩のレールカノンを古手に向ける

古手「お前何か忘れてないか？俺達は「2人」なんだよ」

後ろからビームライフルを持ったシャルルが飛び出す

シャル「させないよ」

ラウラ「なにっ！」

ビュンビュン

ビームライフルでラウラを狙いCEを削る

ラウラ「ちっ」

シャル「逃がさないよ追加射撃で頭のイーゲルシュテル（バルカン）でCEをできるだけ削る」

その間に古手はのほんさんのほうに行き CEを0にさせる

本音「あちゃー」

ラウラはレールカノンでシャルルを狙い放つが

ガギン

シールドで回避させられる

ラウラ「ならば！」

ラウラはワイヤーブレードを射出する

シャルル「しまった！」

ラウラ「おしまいだ」

レールカノンでシャルルを狙うが・

ザシュ！

ラウラ「！」

そう古手がイグニッションブーストを使い

ビームサーベルで回転しながらワイヤーブレードを斬る

そしてシャルルは斬れたと同時にソードストライカーに換装して
ラウラのレールカノンを壊すそして古手はラウラに蹴りを入れ
アリーナの壁にぶつけさせる

ツドツカーン

ラウラサイド

ラウラ「う・・・ぐ・・・」

わ・・・わたしはまけてしまうのか？

（力がほしい）

かなえてやろうか？

ああ・・・私のすべてをやる

その代わり私に力をくれ！

D a m a g e L e v e l …… D .

M i n d C o n d i t i o n …… U p l i f t .

C e r t i f i c a t i o n …… C l e a r .

《 V a l k y r i e T r e e S y a t e m 》 …… O k

シャルル「ありがとう、雅樹」

古手「問題はないだが・・・」

シャルル「どうしたの？」

古手「来るよ・・・VTシステム・・・」

シャルル「VT・・・システム・・・ってまさか！」

シャルルが気づいたその時

バリバリバリバリバリ

急な放電がラウラから発生してラウラが叫んでいる

ラウラ「ア・・・あああああああああああああああああああ」

ラウラが電流が走るとともにラウラが飲み込まれていき変形していく

そして・・・

一夏サイド

一夏「なんだよあれ・・・っ！あれは！・・・」

そう一夏が見たものは雪片・・・そう姉織斑千冬のかつて振るっていた
刀それに似ていたいや・・・にて入るではない複写トレースしている

一夏がラウラのところに行こうとした瞬間

千冬「どこへ行く」

一夏「千冬姉！」

千冬「織斑どこへ行こうとしている」

一夏「あいつ・・・ラウラのところへさ」

千冬「許可できない」

一夏「なんでさ！」

千冬「お前が言ってもあいつの邪魔だ
あいつがやってくれる」

一夏「だけど！」

そこに1本の通信が入った

古手『そうあせるな俺がやってやる』

一夏「いや俺がやる」

古手『くるなお前が来ても邪魔だ
来たらどうなるかわかってるよな・・・』

一夏「・・・わかった」

古手『織斑先生今からティエリアがミーティアを出現させます』

そこに俺のハロをはめてください 一夏それじゃ後は任せろ』

ピッ

通信が終わると同時にミーティアが出てきた

千冬「これがミーティアか」

ハロ「ハロハロゆっくりゆっくり」

そしてハロをミーティアにはめる

ハロ「ミーティアドッキングモード ミーティアドッキングモード」

ミーティアはカタパルトで射出して行った

一夏（俺は・・・見てるだけしか出来ないのか・・・）

一夏「くそう！」

一夏はカタパルトデッキの壁に拳でなぐった

ゴン

古手サイド

古手「ラウラ！機械に取り組まれていいのか！
お前はそんなやつじゃないだろ！」

ラウラ「ぐああぐああああ」

ラウラは上に上がりシールドと突き抜けてアリーナ上空に上がった

古手「このバカやろう！」

古手は大声で叫びS E E D覚醒をしたそれと同時に
スキル2 Nジャマーキャンセラーを発動する

古手「シャルル！お前もスキル開放しろ！全部だ！」

シャルル「わかった！」

スキル1 S E E D覚醒E Xプラス
スキル2 フェイズシフト装甲E X発動」

そうするとシャルルもS E E D覚醒をし
頭の中がクリアーになる

古手「シャル俺はミーティアとドッキングする時間稼いでくれ」

シャル「了解」

そうするとシャルはランチャーストライカーに換装して
C Eを回復しアグニを構える

シャル「はああっ」

ズドーン

しかし回避される

古手「ミーティアは・・・きた！」

ハロ「ミーティアドッキングモード ミーティアドッキングモード」

古手はフリーダムとミーティアをドッキングして
ラウラのところへ向かう

古手「はああっ・！」

ミサイルをぶっぱなし武器をなくしビームサーベルで
胸を開かせラウラを救出する

しかしそれと同時にミーティアのうしろのブースターが爆発する

古手「なんだ!？」

古手はすぐさまミーティアをパージをしてハロを取り出しをする
そこには小規模な機影がむらがっていた

古手「また武力介入ですか・・・」

ティエ「・・・そうだな」

しかも今度の武力介入は軽く団体さんだった

古手「うつへえ・・・メンドクサイな」

Cランクが4機

Bが2機

Aランクが3機

古手「Cランク機体はジンにBランクにはゲイツ

Aランクには葉厨トリオかよ・・・」

そうAランクの3機はフォビウン・レイダー・カラムティーの3機
がそこに居た

シャルル「雅樹」

古手「ハロとラウラを頼む」

シャルル「・・・わかった」

古手はハロとラウラをシャルルに任せ俺はティエリアに言う

古手「ティエリア・・・ダブルオーライザー」

ティエリア「・・・了解ダブルオーライザー展開」

古手の周りにGN粒子がたまりダブルオーライザーが出てくる

ティエリア「これでいいか？」

古手「十分・・・ダブルオーライザー・古手雅樹 目標を駆逐する！」

それと同時にジンにめがけGNソード？のビームでジンの数を減らす
ビュンビュン

弾が切れたところでGNマイクロミサイルで残りを減らす

古手「くつきついな・・・これは」

右からレイダーのツォーンが発射される

ズドーン

古手「あぶないなSPゲージ・・・スキル2と追加スキル発動できる
な」

フォビドゥンのカマが降りかかるが

GNソード？で受け止めスキルを全部開放する

古手「スキル1開放！ツインドライブシステム

スキル2開放！純粹種イノベーター（ダブルオーライザー）発動！

追加スキル！底力」

ここで古手が前に出てSPゲージをためながらGNマイクロミサイ
ル・GNソード？で

手当たりしだい攻撃をする

そして残り3機
フォビドゥン・レイダー・カラムィティーだけにな
った

シュヴァルツェア・レーゲン（後書き）

さあやってきました

今回も見えてくれてありがとうございます御座います
軽く無双モード入ってるかもしれません
が軽く見てくれるとうれしいですw

今回の機体はこちら

シャルロット専用ストライクガンダム

武装←

ストライク・エールストライカー装備

武器名	距離	効果
-----	----	----

1 アーマーシュナイダー	近	
--------------	---	--

2 高エネルギービームライフル	中	
-----------------	---	--

3 イーゲルシュテルン	中	
-------------	---	--

ランチャーストライカー装備

1 武器アーマーシュナイダー	近	
----------------	---	--

2 武器120mm対艦バルカン砲	中	
------------------	---	--

3 武器アグニ	遠	ダウン
---------	---	-----

ソードストライカー装備

1 武器 シュベルトゲベル	近	
---------------	---	--

2 武器 マイダスメッサー	中	スロー
---------------	---	-----

3 武器 パンツァーアイゼン	近	ダウン
----------------	---	-----

スキル1 S E E D覚醒EXプラス（オリジナルスキル）
スキルの S E E D覚醒EX+EXAMをあわせたもの
動きが早くなる、ブースター量小幅増加、サーチ距離増加、
全ての攻撃がS M A S H判定 攻撃速度増加

スキル2 フェイズシフト装甲EX オリジナルスキル

フェイズシフト装甲+リロードアップ

実弾系武器に対する防御力が増加

武器のリロード速度が25%速くなる

さて次回予告です

攻撃を回避しながら反撃を試す古手
しかし3機からの攻撃が響く
そこに1本のビームに一人の少女が
舞い降りる

次回転生先はインフィニットストラトス（リメイク）

『黒うさぎ』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3354x/>

転生先はインフィニットストラトス（リメイク）

2011年10月31日19時18分発行